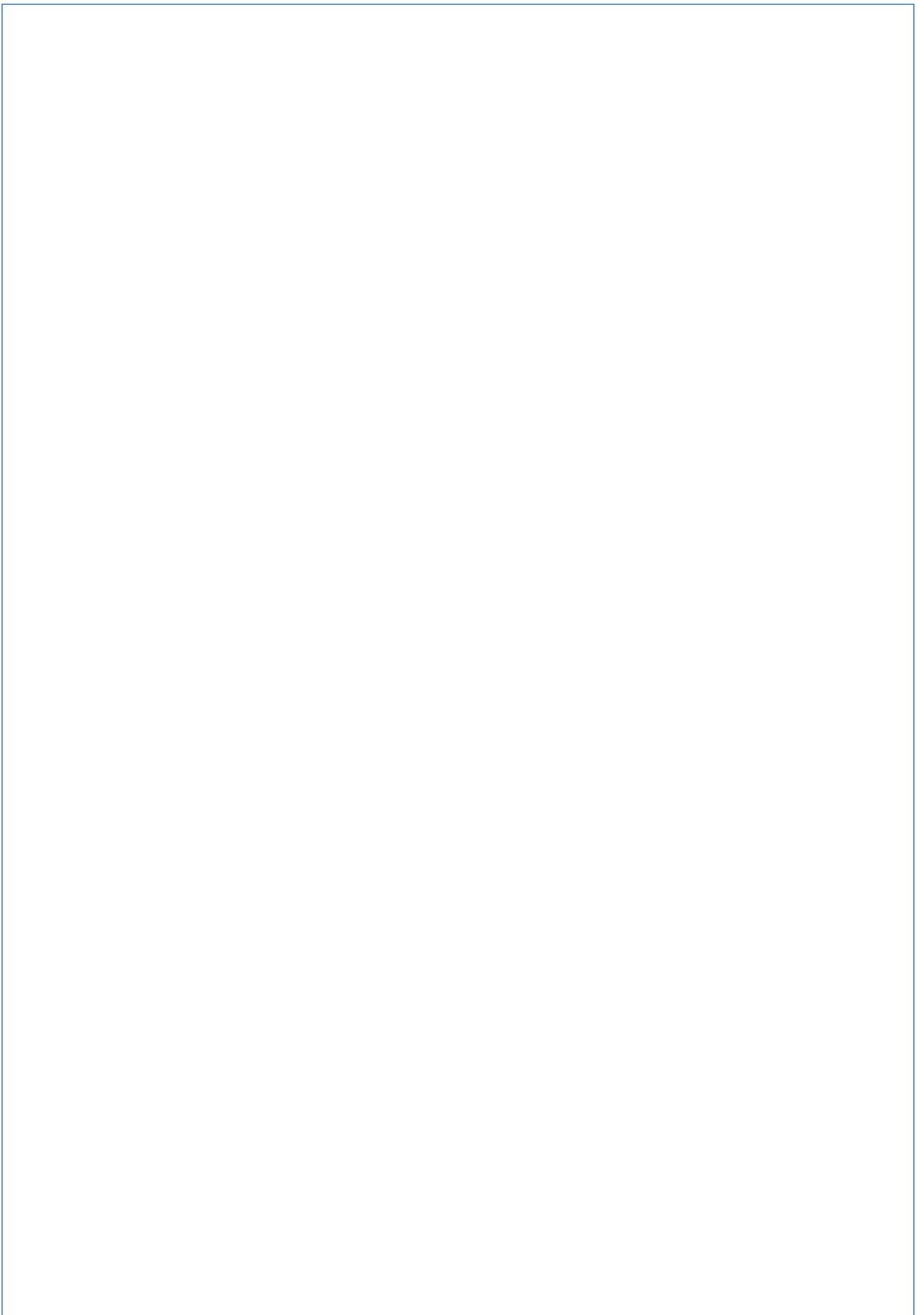


**自然体験を通じた子どもの健全育成研究プロジェクト  
中間レポート**

平成 28 年 3 月

公益財団法人荒川区自治総合研究所



## はじめに

子どもの成長の過程において、自然とのふれあいが根本的と言ってよいほどの大きな意味をもつことは、あらためて言を要しないほど明らかなことであろう。また自然とのつながりの重要性は、子どもに限らず、現役世代や高齢世代を含めて、あらゆる人々にとってあてはまることと思われる。

ところが、現代社会においては、都市化されたややもすれば人工的環境の中で、あるいは近年では「ネット」の情報空間と過ごす時間が増加する中で、そうした自然とのふれあいはきわめて希薄になっており、そこから派生して様々な問題が生じている。

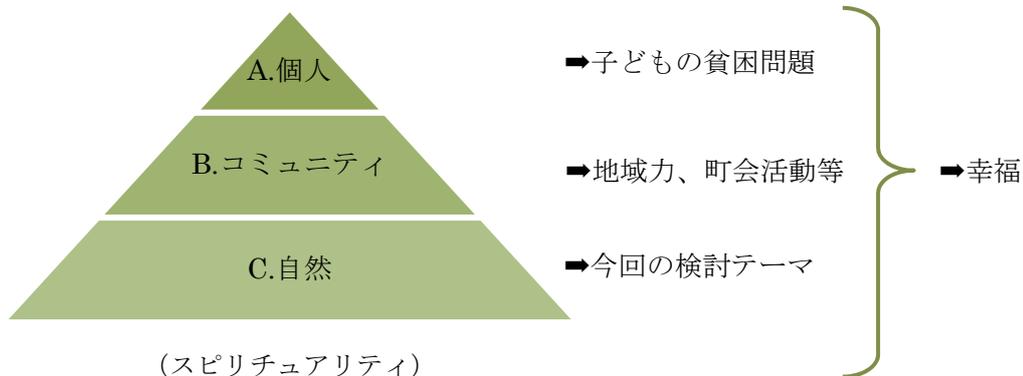
こうした点に関し、たとえばアメリカで 2005 年に出された『あなたの子どもには自然が足りない』（著者リチャード・ルーヴ）という著作は多くの国でベストセラーとなり、そこでは「自然欠乏障害（Nature Deficit Disorder）」というコンセプトが提起されるとともに、子どもあるいは広く現代人は自然とのつながりが根本的に不足しており、それが発達の過程にマイナスの影響を及ぼすとともに、大人を含めて様々な現代病の背景にもなっているとの議論が展開されている。

このように、子どもの自然体験あるいは人と自然との関わりは、心身の発達や健康等にとって本質的な意味をもつと同時に、現在国際的に大きな関心事となり、また荒川区が先駆的に取り組んできた「幸福」（ないし幸福度指標）をめぐるテーマとも深い関係をもっている。他でもなくこうした点が、本研究会において「子どもの自然体験」を取り上げる基本的な背景となっているのである。

いま、子どもの自然体験あるいは人と自然との関わりというテーマと「幸福」との関係についてふれたが、今回の研究テーマを、荒川区が従来取り組んできた幸福度に関するいくつかのテーマとの関連性において位置づけると、次のような整理が可能ではないかと思われる。

やや理念的な整理となるが、人間をめぐる諸次元を大きくとらえると、それは図 i のような、「個人ーコミュニティー自然」という重層的な構造をもつものとしてとらえることが可能である。

図 i 人間をめぐる基本的構造



この場合、「個人」が独立した主体として社会の中で生活を営んでいけること（及びその保障）が重要である一方、個人は単独で存在するものではなく、そこには「コミュニティ」という基盤があり、他者とのつながりや地域社会、世代間継承性といった要因が重要な意味をもつ。さらに、コミュニティは“真空”の中で存在するものではなく、そのベースには「自然」という次元が本質的なものとして位置している。

このように考えていくと、個人としての独立性を一定保ちつつ（あるいはそれが保障されつつ）、コミュニティや自然との確固たる通路をもっていることが、人間の「幸福」にとって重要なものにとらえることができる（ちなみに「自然」のさらに根底にある次元として、生と死あるいは存在の根源に関わるような、精神的な次元を想定することもでき、図ではひとまず「スピリチュアリティ」と表記しているが、これは「鎮守の森」や“八百万の神様”といった自然観ないし伝統文化をもつ日本人にとっては比較的なじみやすいものと考えられよう）。

以上のような整理を踏まえると、これまで荒川区が幸福度との関連で取り組んできた諸テーマは、

- ・「子どもの貧困」 → 人生の初期段階において、各個人がそのポテンシャルを発展させていく基礎的な条件を保障するという意味で、図における「個人」の次元に主にに関わり、
- ・「地域力」、町会活動など → 「コミュニティ」の次元に主にに関わり、
- ・今回の研究テーマ → 「自然」の次元に関わる  
(子どもの自然体験)

という、概括的な理解が可能ではないかと思われる。

この場合、これらの諸次元は相互に関連し合っており、それらを総合的にとらえていくことも重要な課題であろう。

たとえば、町会などが主体となって、子ども・現役世代・高齢世代など多世代が関わりながら自然との関わりをもつような活動は、「自然」と「コミュニティ」双方に関連するものであり、また、子どもの自然体験あるいは「自然へのアクセス」に“格差”が生じないようにすることは、「子どもの貧困」問題あるいは「個人ーコミュニティー自然」のいずれにも関連する課題と言える。

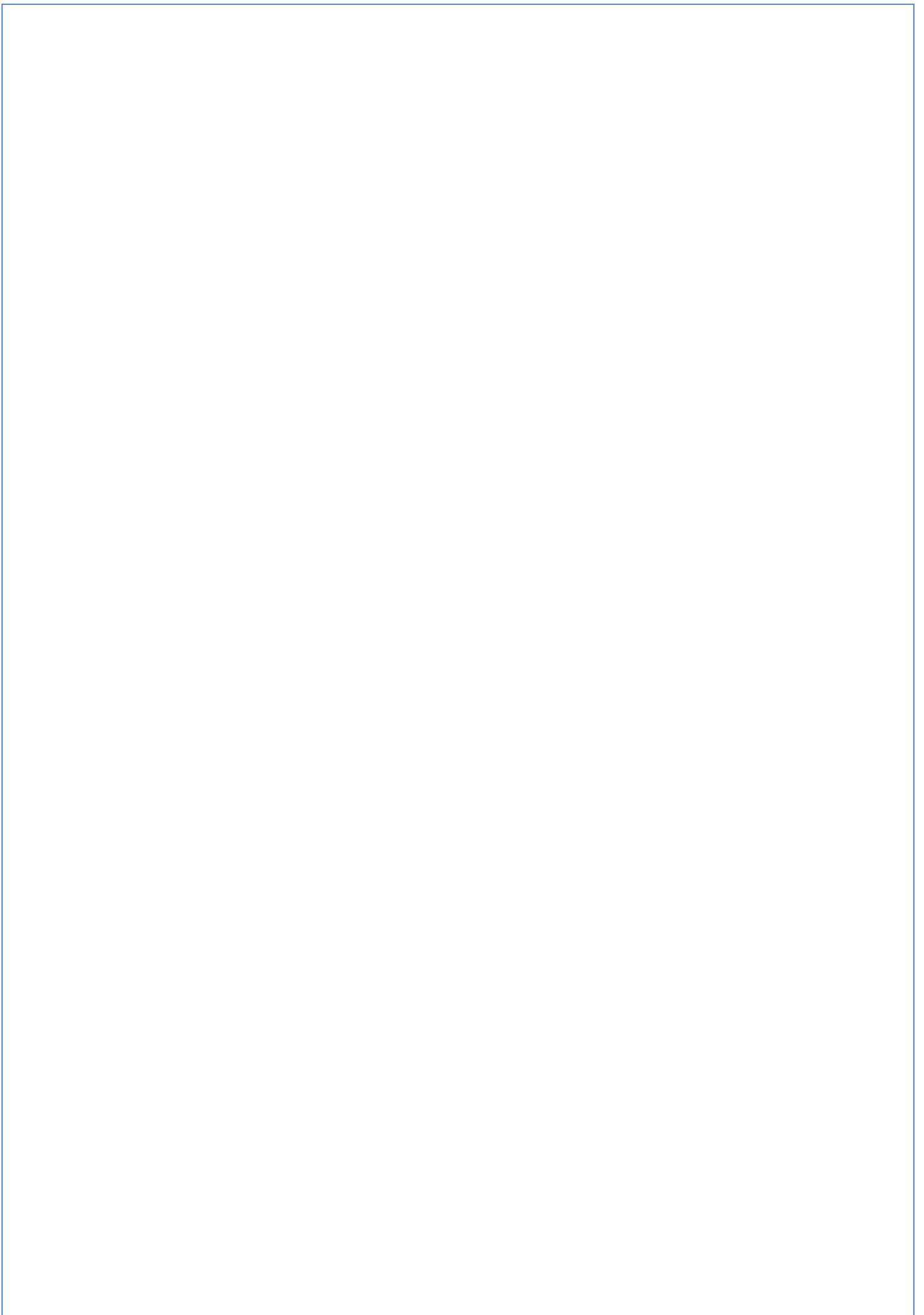
また、荒川区に住む子どもや住民にとっての自然体験は、現在既に実施されている自然体験プログラムの一部がそうであるように、荒川区以外の自治体との交流を広く含むものであり、幸福度施策との関連で進められている「幸せリーグ」、ひいては現在新たな関心となっている都市・農村交流や地方創生をめぐるテーマとも深く関連することも銘記しておきたい。

いずれにしても、本研究会で取り上げる「子どもの自然体験」というテーマは、人間にとっての、あるいは地域における「幸福」にとっての土台とも言えるような重要性をもっている。本中間レポートの内容は、そうしたテーマについての探究のお出発点にとどまるものであるが、幸福度との関連を視野に入れながら「子どもの自然体験」あるいは人と自然との関わりを取り上げたものとしては一定の先駆的な意義を有するものではないかと考えている。本レポートの内容が、読まれる方にとって何らかのヒントになるものであれば、プロジェクトのメンバー一同この上ない喜びと感ずる次第である。

自然体験を通じた子どもの健全育成研究プロジェクト  
座長 広井 良典

# 目次

はじめに.....	i
I 研究概要.....	1
1 本レポートについて.....	1
2 生きる力と幸福.....	1
3 自然と自然体験.....	2
(1) 自然とは何か.....	2
(2) 自然体験とは何か.....	4
4 研究のアプローチ.....	4
(1) 2つのアプローチ.....	4
(2) アンケート調査について.....	5
(3) 既存事業の体系整理とインタビュー調査について.....	6
II 自然体験を通じた子どもの健全育成に関する調査研究.....	7
1 調査概要.....	7
(1) 調査名.....	7
(2) 調査目的.....	7
(3) 調査対象.....	7
(4) 調査期間.....	7
(5) 調査方法.....	7
(6) 調査項目.....	8
(7) 有効回答者数.....	9
2 調査結果の概要.....	10
(1) 集計結果.....	10
(2) 分析と考察.....	14
III 荒川区の子ども達の自然体験をとりまく現状.....	21
1 子どもの自然体験に係る体系整理.....	21
(1) 基本的視点.....	21
(2) 平成27年度自然体験関連事業一覧.....	22
(3) 平成27年度自然体験関連事業の体系整理.....	28
2 事例調査.....	35
(1) 事例①「自然まるかじり体験塾」.....	35
(2) 事例②「少年キャンプ(チャレンジキャンプ)」.....	35
(3) 事例の考察と課題.....	38
IV 子ども達の自然体験をさらに推進させていくために.....	39
1 基本的アプローチ.....	39
(1) 連携の強化.....	39
(2) 人材育成.....	40
(3) 新たな視点.....	41
2 今後の展望と検討課題.....	43
付表.....	45
1 調査票.....	45
2 アンケート結果単純集計表.....	46
参考文献.....	50
研究会議名簿.....	52



# I 研究概要

(山田庄太郎)

## 1 本レポートについて

自然への畏敬の念を育み、社会の持続可能性への理解を深め、人のつながりの大切さを学ぶため、荒川区は平成 27 年度より新たに自然体験事業の充実を打ち出したところである。

これを受け、荒川区自治総合研究所は自然体験を通じた子どもの健全育成研究プロジェクトを立ち上げ、荒川区が実施している自然体験事業について、子どもの健全育成という観点からその有用性の検証を行うとともに、より効果的・効率的に事業を実施していくための調査研究を実施することとした。

本レポートはその調査研究の中間成果を取りまとめたものである。

考察に入る前に、まず本レポートで用いる子どもの健全育成と自然体験の概念について簡潔に確認しておくこととしたい。

## 2 生きる力と幸福

本レポートでは、荒川区自治総合研究所がこれまでに行ってきた荒川区民総幸福度（Gross Arakawa Happiness: GAH）への取り組み<sup>1</sup>と、文部科学省の基本的な方針を踏まえ、子どもの健全育成を「生きる力」の涵養として理解する。

文部科学省は現行の学習指導要領において、子ども達の「生きる力」を育むことを学校教育の大きな目標としており、「生きる力」は「確かな学力」と「豊かな人間性」「健康・体力」に基づく知・徳・体のバランスのとれた力として定義される（図 1、文部科学省 2011）。ここで言う学力とは、いわゆる試験のための知識に留まるものではなく、社会生活で求められる様々な知的・社会的スキルの総称である。したがって「生きる力」とは、子ども達一人一人が社会の一員として、自ら主体的に考え行動し、様々な課題を解決していくための能力であり、将来にわたり自らの幸福を追求していく上で基礎となる力に他ならないと言える。

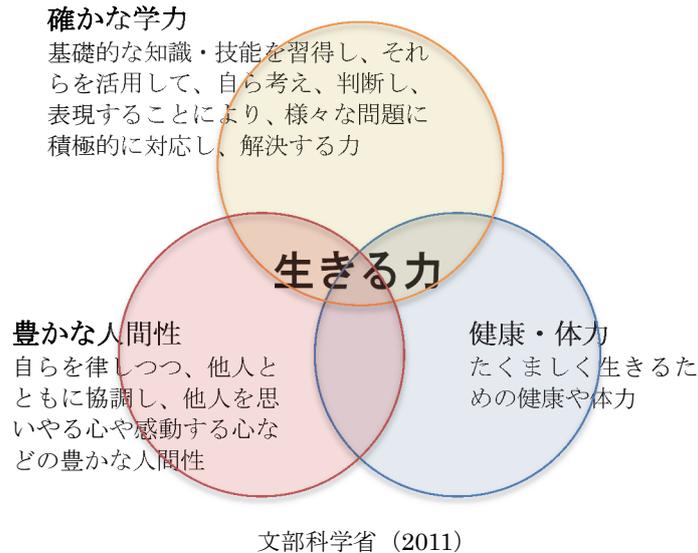
一方、荒川区（2015a）は、自然体験を通じた子どもの健全育成の目標として、地域社会の担い手の育成、自己肯定感等の向上、体力アップの 3 点を挙げているが、心身の健全な発達と種々の知的・社会的スキルの向上を図るという点で、言葉は違えども、文部科学省が提唱する「生きる力」の構成要素と基本的には同じものを指しているといえることができるだろう。

「生きる力」を構成する知・徳・体の 3 要素をそれぞれどのように呼称するかについては未だ定まったものが無いため、本レポートでは「生きる力」を構成する要素を、種々の「知的・社会的スキル」と「豊かな心」、「体力」の 3 つの言葉で表すことにする。

---

<sup>1</sup> 荒川区では区政運営の指針の一つとして幸福度を活用することを目的に、2005 年に庁内の若手職員によるプロジェクトチームを設置し、荒川区民総幸福度についての調査研究を開始した。2006 年には、区が区民を対象に毎年実施している「荒川区政世論調査」に「GAH（荒川区民総幸福度）について」の項目を付け加える形で、全国に先駆けて住民の幸福実感に関するアンケート調査を実施している。さらに 2009 年には、シンクタンクとして荒川区自治総合研究所を設置した。幸福実感都市あらかわの実現に向けた区独自の包括的な幸福度指標を作成するため、「荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究プロジェクト」を立ち上げた。同研究プロジェクトの研究成果（荒川区自治総合研究所 2011a；同 2012）を基に、幸福度を区政運営に有効に活用するための荒川区民総幸福度指標（GAH 指標）を作成した。2013 年度より同指標を用いた「荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民アンケート調査」を実施し、毎年その集計結果を公表するとともに、2015 年度からは集計結果に分析を付した「荒川区民総幸福度（GAH）レポート」シリーズを順次公開している（荒川区自治総合研究所 2015a；同 2015b）。またこの間、不幸を減らすという観点から子どもの貧困問題を取り扱った調査研究を実施し、問題解決のための各種提言を行っている（荒川区自治総合研究所 2011b；同 2011c）。

図 1 「生きる力」概念図



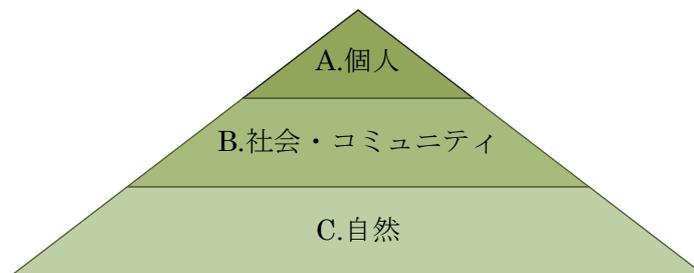
### 3 自然と自然体験

#### (1) 自然とは何か

子どもの健全育成をどのような観点から捉えるかという点に続いて、「自然」とは何かについても確認しておく必要があるだろう。

「自然」の語が指し示す範囲は幅広い。深い森や見渡す限りの草原、山々や海といった人の手の届かない大自然等と呼ばれる「自然」がある一方で、部屋の中の鉢植えの緑といった身近なものまでが同じ「自然」という言葉で呼ばれる。さらに我々人間も、また人間のつくる社会・コミュニティも、地球の生態系の一部を成しているのであり、その限りで我々は「自然」の一部である (図 2) <sup>2</sup>。

図 2 人間と社会、自然の関係



自然は我々の社会・コミュニティの重要な基礎であり、自然を守るとは我々の社会・コミュニティの存立を守ることでもある (cf. 広井 2006:255; 2011:257; 2015:223)

自然の語が持つこのような意味の広がりや、過不足なく端的に定義することは困難である。

たとえば Kaplan & Kaplan (1989: 2-3) は我々が通常用いる自然という語の内には、公園や街路樹、裏庭なども含まれるとした上で、人間の手の入っていない純粋に自然の要素だけを含んだ意味で「自然環境」という表現を用いることや、都市や農村といった二項対立的図式<sup>3</sup>を持ち込むことが

<sup>2</sup> 『野生のうたが聞こえる』で有名なアメリカの環境保護活動家アルド・レオポルドは、環境問題の根幹を、我々人間が自然とのつながりを喪失し、自然と疎遠になってしまった点に見ている (Leopold 1949)。

<sup>3</sup> ドイツとリトアニアでそれぞれ、都市居住者と農村居住者を対象に調査を行った Müller, Kals, & Pansa (2009) は、

決して議論の助けにならないと述べている<sup>4</sup>。

しかし研究を進める上では、やはり何らかの定義を与えなくてはならない。

オランダの保健協議会と空間設計・自然・環境研究のための諮問委員会は、共同で提出した報告書『ネイチャーアンドヘルス』(HCN&DACRSPNE 2004)の中で、自然の一般的定義の困難さを認めた上で、ファン・デン・ベルクラ (van den Berg & van den Berg 2002) による「我々は自然を、様々な有機体があるいはそれら有機体の生態環境がその内において自らを極めてよく発揮することができる環境として理解する。こうした環境には、手つかずの自然に加え、農場や生産林、都市の緑地、裏庭も含まれることになる」という非常に広範な定義を採用し、「自然」の語で指し示される様々な自然環境の内、次の6つを具体的な例として挙げる。

表 1 HCN&DACRSPNE (2004) による自然の 6 類型

(1) 都市の自然	都市環境内の自然 例. 庭、公園、レジャーパーク、路肩の土、生垣、水浴びできる水場
(2) 農地の自然	農業や畜産、林業等に主に用いられる小規模だがそのままの自然が所々残されている景観 例. 害獣避け付の巣箱、休耕地、灌漑水路
(3) 生産林	材木を産出することを主たる目的とする森林の中の自然
(4) 伝統的田園風景の内に見られる自然	小規模で人間が手を加えた景観の内に高度な生物多様性を持ちながら存在する自然で、多少なりとも何らかの歴史的な理由から保存が行われているもの
(5) 自然林	本来の植生により近くなるよう管理された森林の中にある自然
(6) 大自然	自生的な発展を行うことができ、最小限の管理のみで維持することが可能な環境の中にある自然 例. ワッデン海、自然の河川、湿地林等

この(1)から(6)のカテゴリーは、(1)の人間の手によってほぼ完全に管理された「都市の中の」自然と、(6)の人間の管理の手が入っていないいわゆる「手つかずの」自然を両極に据え、人間による管理の度合いに応じて(2)から(5)の4つの段階を設けたものである。

無論、自然は連続体であり、上記6つのカテゴリーで全てを網羅できるわけではない。またその一方で、不必要に多くのカテゴリーを立てることで議論を徒に複雑化させる必要もないだろう。

そこで本レポートでは上述のファン・デン・ベルクラの定義を採用した上で、自然を以下のように分類する：

表 2 本レポートにおける自然の 3 類型

類型	具体例
(a) 都市の中の自然	鉢植えの緑や公園の緑
(b) 農山漁村の自然	都市の郊外、農山漁村の自然
(c) 大自然	人間の管理の下にない自然

いずれの国でも都市居住者と農村居住者を比較すると、農村居住者の方が自然との接触の機会が多いものの、「自然との情動的な結びつき (Emotional Affinity toward Nature)」に関しては有意な差は認められなかったと報告している。「自然との情動的な結びつき」の概念については Kals, Schumacher, & Montada 1999 を参照。

<sup>4</sup> また Kaplan & Kaplan (1989: 2) は「自然」という語が用いられる時、しばしば動物相 (fauna) が見落とされている点にも注意を促している。

この表 2 の分類は動植物の生態環境がどの程度自生的であるかに基づくものであり、表 1 の 6 つのカテゴリの内、その両端を残しながら中間を単一のカテゴリとしてまとめて簡略化したものである。したがって表 2 の(a)から(c)のカテゴリは以下のように定義される。

(a)の都市の中の自然では生態環境の大部分を人間が管理している。(b)の農山漁村の自然では、生態環境は人間がその維持にある程度重要な役割を果たしているが、同時に自然の自発性・自生性にも大きな役割が与えられている。(c)の手つかずの自然では、人間による管理は最小限であるかほとんど無視できる程度であり、自然の自発性・自生性によって生態環境が維持されている。

以上、自然についての定義とその分類が示されたところで、最後に「自然体験」とは何かという問題に移ることにしよう。

## (2) 自然体験とは何か

本レポートでは「自然体験」を、その活動の中で自然に触れる機会を有する様々な活動として定義する。

このような広範な定義を採用する理由は、自然体験が農業体験や漁業体験など通常の活動体験とは異なる性格を有しているように思われるからである。農業体験や漁業体験が農業や漁業という特定の活動目的と結びついているのに対し、多くの場合、自然体験は自然を体験すること自体を目的としてはいない。たとえば、釣りや登山、星の観測や昆虫採集はそれぞれ固有の目的をもった活動であるが、その活動を通し、自然に触れ、自然の持つ不思議や生命の意義について思いを致す時にその活動は、本来の活動の性格を残しながらも、自然体験へと変わるのである。

上述の自然の分類と結びつけて言えば、(a)の都市の中の自然で行われる自然体験には近隣の公園内での散歩や花壇づくり、庭いじりなどが、(b)の農山漁村の自然で行われる自然体験には郊外の田畑での芋ほり体験や港での漁業体験などが、(c)の大自然の中で行われる自然体験には登山や海水浴などが挙げられるだろう。

ただし、これら様々な自然体験はそれぞれ個々の活動に固有の活動目的を有している。恐らく、この点については特に強調しておく必要があるだろう。なぜならこの事実は、逆説的に次のことを意味しているからである。すなわち通常は自然体験と考えられていない様々な活動も、見方や捉え方を変えることで、自然体験の重要な機会となることがあり得るということである。

かつてカーゾン (1996[1956]) は、自然の神秘に目を見張る感性 (センス・オブ・ワンダー) の重要性を説いた。自然そのものを感じる感性を磨くことで、日々の何気ない活動が豊かな自然体験へと変わる可能性がそこには存在しているのである。既に述べたように、我々人間のつくる社会・コミュニティは自然の中に存在する。その意味で我々の活動の全てが自然体験へと変わる可能性を秘めているとも言える。自然体験を豊かなものとしていくためには、活動内容を充実させることはもちろん、我々自身がまず身の回りの自然へ気づき、それらに目を向けることが大切である。

## 4 研究のアプローチ

### (1) 2つのアプローチ

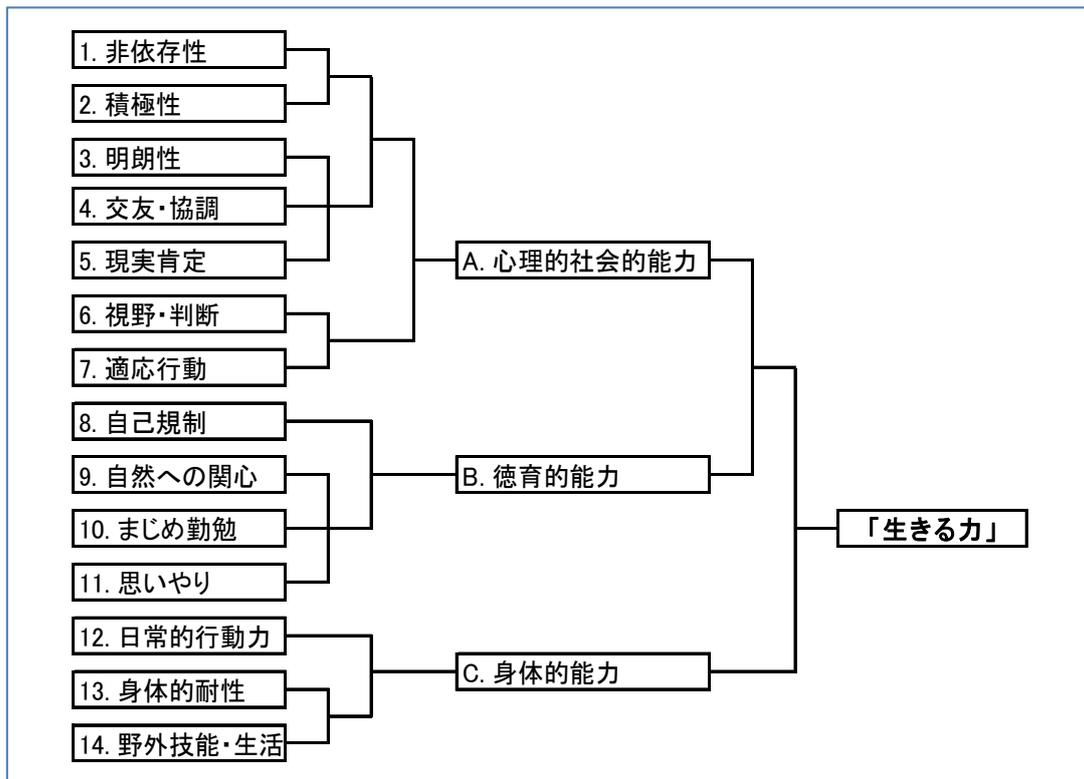
本研究ではまず、子どもの健全育成に関する自然体験の効果を明らかにするため、アンケート調査を実施した。また自然体験をより効果的・効率的に実施していくためにはどのようにすれば良いか、課題とその対策を明らかにするため、既存事業の体系整理とインタビュー調査を行っている。

## (2) アンケート調査について

アンケート調査では自然体験の代表例として、荒川区の小学校で行われている移動教室を取り上げ、移動教室の前後で「生きる力」に向上が見られるかを調査した。

「生きる力」を測定する指標としては、国立青少年教育振興機構（2010）が作成した「IKR 評定用紙簡易版」と同じ指標を用いた。これは橘・平野・関根（2003）の開発した70の質問項目から成る「IKR 評定用紙（IKiRu chikara 評定用紙）」を簡略したものであり、28の質問項目から成る（図3および8頁の表4を参照）。またアンケートでは、生きる力と主観的な幸福実感との関係を調査するために、子どもの幸福実感についても尋ねた。

図3 橘ら（2003）の「生きる力」を構成する指標



橘ら（2003: 48 図1）

ただし、幸福実感には、ある特定の得点範囲を維持しようとするホメオスタシス効果<sup>5</sup>があることが知られている（Cummins & Nistico 2002; Cummins, Gullone & Lau 2002; Cummins 2010）。また、幸福実感が将来の長期的な展望の下に形成されるものであると仮定するなら、移動教室の前後という極め

<sup>5</sup> これまでの研究によって、主観的な幸福実感を得点として尋ねると、回答者からは通常、ある一定の範囲の肯定的な回答が得られることが分かっている。たとえば100点を満点とした場合、西欧圏では幸福実感の平均得点（幸福度）は一般に70-80点の範囲に留まる（アジア圏では文化的要因から得点範囲は西欧より10点近く低くなる）ことが知られている（International Wellbeing Group 2013: 20）、経年比較を続けてもその値はほとんど変化しないことが明らかとなっている（Cf. Cummins, Li, Wooden & Stokes 2014）、さらには各個人を見ても、一時的に幸福実感が高まったり減少したりする場合はあるとはいえ、幸福度は通常、時間が経つとこの（西欧の場合であれば70-80点という）得点範囲内に戻ることが報告されている。主観的幸福の持つこのような性質を、Cumminsらは人体の生理的な恒常性維持機能—たとえば恒温動物の体温維持機能—になぞらえて、幸福実感のホメオスタシス効果と呼称した。

て短期間の間に、主観的な幸福実感が大きく増減する可能性は低いものと思われる<sup>6</sup>。

次章で見るように、今回の調査では幸福実感についても事前調査と事後調査の2回に分けて尋ねている。しかし、これは短期的な幸福実感の増減を測ることを企図したものではなく、むしろ事前調査と事後調査のそれぞれにおいて、幸福実感が生きる力を構成する各指標とどのような相関関係を示しているかを分析するために行われたものである。

長期的な幸福度の増減には、経済的状況を含め、様々な要因の影響が考えられるのであり、調査結果の解釈には十分な慎重さが求められる。

### (3) 既存事業の体系整理とインタビュー調査について

現在、荒川区で実施されている自然体験事業を一覧化し、一つの体系として整理分類することは、縦割りによる事業の重複や、必要な事業の不足等を洗い出し、より効率的な区政運営を行う上で極めて有益な手法である。

また各事業について、実務者の立場から見た課題とその対策を明らかにするため、インタビュー調査を実施した。

---

<sup>6</sup> 幸福度がある特定の得点範囲に安定して留まり続け、ほとんど増減しないことについては、経済や社会情勢の強固な安定性の影響がその要因として指摘されることがあるが、一方で一部の研究者は「幸福度の個人差は…基本的には偶然の産物であり、「より幸福になろうとする試みは無益であるかもしれない」(Lykken & Tellegen 1996: 189) という幸福度研究そのものへの懐疑的な考えを示している。これに対して、幸福実感のホメオスタシス効果を認める研究者達は、ホメオスタシス効果をもたらす人間の内的機構に着目することで、幸福度研究を幸福度向上のための政策的な取り組みにつなげるための新たなステップを構築しつつある。彼らによれば、主観的な幸福実感が安定した値をとり続けるのは、人間の体温が一定であるのが人体の体温調節機構の影響であると同様に、たとえば心理的な防衛機制など人間の精神の内に幸福実感の恒常性をもたらす何らかの機構の影響であると考え(無論、このことは経済状態等の外的な諸要因が幸福実感に与える影響を排除することにつながるわけではない)。たとえば、抑うつ状態の人は幸福実感も低いことが明らかとなっているが(Davey 2004, Bittar 2009)、このような人々の場合、幸福実感のホメオスタシス効果を阻む諸要因が存在することが想定される。したがって、それらの阻害要因を解消していくことが幸福実感の向上につながるものであり、いわば不幸な人を減らすという方法で、個人の、また社会全体の幸福実感を向上させようというアプローチが新たに模索されている(Cf. Cummins, Lau, Mellor & Stokes 2009; Cummins 2010; Cummins et al. 2014)。

## II 自然体験を通じた子どもの健全育成に関する調査研究

(二神常爾、河野志穂、山田庄太郎)

### 1 調査概要

自然体験が児童の健全育成に何らかの影響を与えるのか否か、また影響を与えるのであれば、具体的にどのような効果が期待されるのかを調査するため、移動教室に参加する児童を対象にアンケート調査を実施した。調査の概要は以下のとおりである。

#### (1) 調査名

「移動教室に関するアンケート調査」

#### (2) 調査目的

移動教室が児童の健全育成に与える影響の調査

#### (3) 調査対象

区立小学校に通う小学5年生の児童 341名

#### (4) 調査期間

2015年9月3日(木)～10月6日(火)

#### (5) 調査方法

2015年9月に清里移動教室を実施する区内の小学校7校に調査票を送付し調査を依頼した。7つの学校での調査実施日は表3のとおりである。移動教室の前後の計2回、同一の質問項目への回答を求め、得られた回答を移動教室の前(事前調査)と後(事後調査)で比較した。

表3 調査対象と調査実施日

学校名	移動教室実施日	事前調査 実施日	事後調査 実施日
A小学校	2015年9月7日～9日	9月3日	9月10日
B小学校	2015年9月7日～9日	9月4日	9月10日
C小学校	2015年9月14日～16日	9月11日	9月17日
D小学校	2015年9月14日～16日	9月11日	9月17日
E小学校	2015年9月16日～18日	9月15日	9月24日
F小学校	2015年9月28日～30日	9月27日	10月2日
G小学校	2015年9月28日～30日	9月25日	10月6日

移動教室は荒川区立清里高原少年自然の家(山梨県北杜市)を宿泊場所として、2泊3日の日程で行われる。宿舎周辺のナイトハイクなど、各校がそれぞれ特色ある自然体験のプログラムを組んでいるが、どの学校でも活動の中心となるのは飯盛山の登山と牧場での牧場体験である。雨天時には登山は中止となるが、それに代わる活動が与えられる。日程にはその他に、ほうとう作りなどの生活体験活動も組み込まれている。なお、いずれの学校も移動教室期間中に、日記を書くための時間や、一日の活動を振り返るための時間を設けており、活動の理解を深める工夫がなされている。

## (6) 調査項目

調査は幸福実感度に関する設問 1 項目と、「生きる力」に関する設問 28 項目から成る（表 4）。

幸福実感度は「とてもしあわせだ」（10 点）から「まったくしあわせでない」（0 点）までの 11 段階の中から自分にあてはまるものを回答してもらった。

「生きる力」の測定に関しては、国立青少年教育振興機構（2010）が作成した IKR 評定用紙簡易版（5 頁参照。以下「IKR」とする。）の質問項目を用い、「とてもよくあてはまる」（6 点）から「まったくあてはまらない」（1 点）までの 6 段階の中から自分にあてはまるものを回答してもらった。

IKR は、「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の 3 つの上位指標を持ち、「心理的社会的能力」は「非依存性」「積極性」「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」の 7 つの下位指標から、「徳育的能力」は「自己規制」「自然への関心」「まじめ勤勉」「思いやり」の 4 つの下位指標から、「身体的能力」は「日常的行動力」「身体的耐性」「野外技能・生活」の 3 つの下位指標から構成される。各下位指標の得点は、関連する 2 つの設問の回答の得点を合計したものである。使用した調査票は参考資料として巻末に付してある。

表 4 調査項目一覧

調査項目		質問文	回答方法
幸福実感度		「あなたは幸せですか」	0～10 の 11 段階評価
生きる力	心理的社会的能力 (得点範囲) 14-84 点	非依存性	「いやなことは、いやとはっきり言える」
			「小さな失敗をおそれない」
		積極性	「自分からすすんで何でもやる」
			「前むきに、物事を考えられる」
		明朗性	「だれにでも話しかけることができる」
			「失敗しても、立ち直るのがはやい」
		交友・協調	「多くの人に好かれている」
			「だれとでも仲よくできる」
		現実肯定	「自分のことが大好きである」
			「だれにでも、あいさつができる」
		視野・判断	「先を見通して、自分で計画が立てられる」
			「自分で問題点や課題を見つけることができる」
		適応行動	「人の話をきちんと聞くことができる」
			「その場にふさわしい行動ができる」
	徳育的能力 (得点範囲) 8-48 点	自己規制	「自分かってな、わがまを言わない」
			「お金やモノのむだ使いをしない」
		自然への関心	「花や風景などの美しいものに、感動できる」
			「季節の変化を感じるができる」
		まじめ勤勉	「いやがらずに、よく働く」
			「自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる」
		思いやり	「人のために何かをしてあげるのが好きだ」
			「人の心の痛みがわかる」
	身体的能力 (得点範囲) 6-36 点	日常的行動力	「早寝早起きである」
			「からだを動かしても、疲れにくい」
		身体的耐性	「暑さや寒さに、まけない」
			「とても痛いケガをしても、がまんできる」
		野外技能・生活	「ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える」
			「洗濯機がなくても、手で洗濯できる」
			1～6 の 6 段階評価

## (7) 有効回答者数

有効回答者数は 255 である。

事前調査と事後調査の双方で 29 の質問項目全てに有効な回答を行った者のみを有効回答者として集計した。29 の質問項目の全てで一方の極に偏って回答している場合（問 1 に 0 と回答し問 2-29 の全てに 1 と回答した場合か、あるいは問 1 に 10 と回答し問 2-29 の全てに 6 と回答した場合）は、回答を放棄したもものとして集計の対象に含めなかった。

### 統計を学ぼう：検定と有意水準

次節「アンケート調査の概要」の「分析と考察」の項では、有意水準を 10% に設定し、統計的に有意な結果が得られたデータを中心として考察を行っています。

ある集団の性質や傾向性を明らかにする（たとえば「リンゴが好きか苦手か」等）上で最も確実な方法は、その集団に属する人全てに同じ質問を行って答えを得ることです。このように対象となる集団の全体を対象にして調査を行うことを「全数調査」と言います。しかし対象となる集団の規模が大きくなればなるほど「全数調査」にかかる労力も費用も大きくなってしまいます。

これに対して調査対象となる集団（これを「母集団」と呼びます）から一部の人を抜き出して行う調査を「標本調査」と呼びます。母集団から誰を調査対象に選ぶか（つまり「標本（サンプル）」に選ぶか）については様々な方法がありますが、どのような方法を用いるにせよ、母集団と標本集団の間には必ずズレ（「誤差」）が生じることになります。

たとえば A 小学校には 100 人の児童がいるとしましょう。全員に尋ねた所、50 人はリンゴが好きですが 50 人はリンゴが苦手です。ですからリンゴ好きの人の割合は 50% ということになります。

次に A 小学校の児童から 10 人を選んでリンゴが好きかどうかを聞いてみることにしましょう。この時、必ずリンゴ好きの人の割合が 50% になるわけではありません。なぜなら、選び出した 10 人がたまたまリンゴ好きの人ばかりであったということも当然ありえるからです。

では、A 小学校のリンゴ好きの 10 人に聞いた答えを、そのまま A 小学校の全員の考えとみなすとうなるでしょうか。リンゴ好きの 10 人に聞けばリンゴ好きの人の割合は 100% になるでしょう。一方、A 小学校の全員に聞いた時はリンゴ好きの人の割合は 50% でした。ですから、得られたデータと母集団の本来の姿との間には 50% のズレがあることになります。

標本の選び方を工夫したり、標本の数（サンプルサイズ）を増やすことでこのズレを小さくすることはできますが、ゼロにすることはできません。

したがって、①どの程度の誤差を許容するかを予め定めた上で、②標本調査によって得られた結果が、本当に母集団全体にあてはまるものなのか、それとも偶然の結果に過ぎないのかを考える必要があります。そのために統計学では「検定」と呼ばれる検証方法が編み出されました。

検定は、調査で得られたデータが標本集団の偏りによる偶然の結果に過ぎないという確率を数学的に算出し、偶然の結果を母集団全体にあてはまる結論とみなしてしまう誤りにおちいる危険をできるだけ小さくしようとするものです。得られたデータが偶然の結果かもしれない確率を「有意確率」と呼び、蓋然性を表す英語 probability の頭文字をとって p の字で表します（「p 値」）。予め設定した水準（「有意水準」あるいは「危険率」）よりも p 値が下回っていれば、そのデータは統計的に「有意（significant）」であると言われ、上回っていれば有意ではない、つまり偶然得られた結果である可能性が高いということになります。有意水準としては 0.1% や 1%、5%、10% などの様々な水準が用いられますが、どの水準を選択するかは、調査の目的や内容によって研究者が決定します。

なお、統計的有意性は得られたデータの重要性を示すものではありません。

統計的に有意ではない(not significant)からといって、得られた結果に意味がない(not meaningful)わけではないことに注意しましょう。

## 2 調査結果の概要

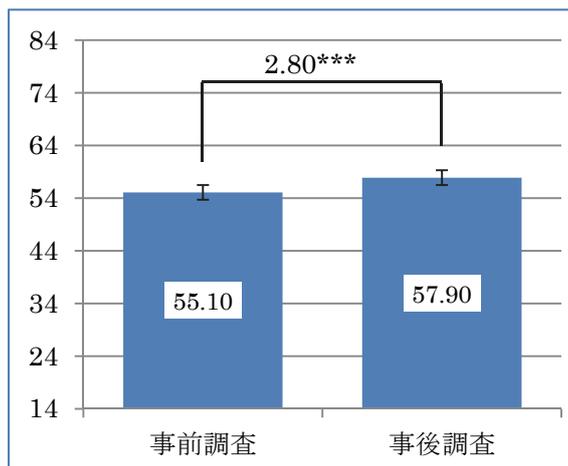
### (1) 集計結果

#### ① IKR 上位 3 指標の事前調査・事後調査比較

ここではまず、IKR 上位 3 指標の事前調査と事後調査における得点の推移について確認する。

「心理的社会的能力」では、事前調査の 55.10 から事後調査では 57.90 へと、2.80 ポイントの得点の上昇が見られた (図 4)。

図 4 「心理的社会的能力」の得点推移 (得点範囲 14-84 点)

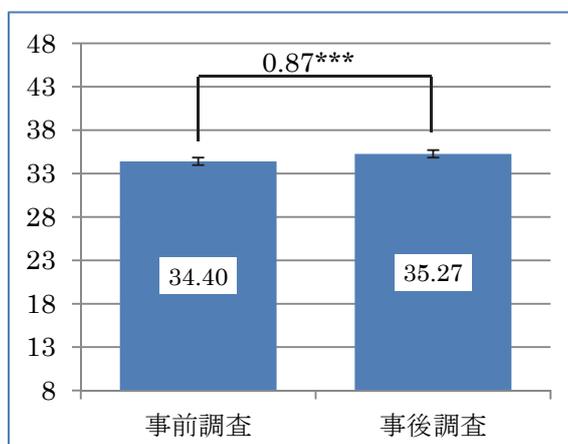


\*\*\*  $p < .001$    \*\*  $p < .01$    \*  $p < .05$    †  $p < .10$

※ 図中央上部の数値は事前調査と事後調査の差を、差の数値の横の記号 (\*\*\*) は両者が統計的に有意な差であるかの検証結果を示す。また、縦棒上部の I 字型の線は標準誤差を示す (以下同)。

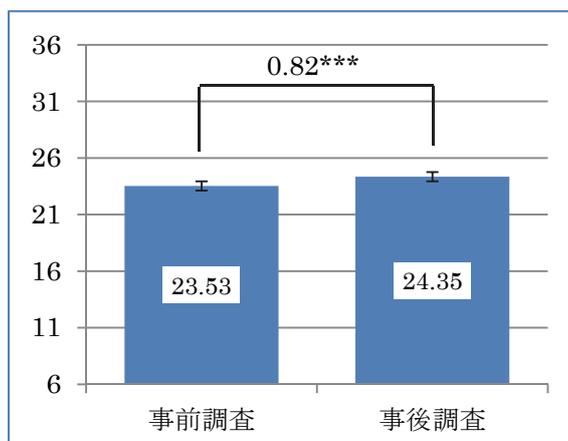
「徳育的能力」では、事前調査の 34.40 から事後調査では 35.27 へ、0.87 ポイントの得点の上昇が見られた (図 5)。

図 5 「徳育的能力」の得点推移 (得点範囲 8-48 点)



「身体的能力」では、事前調査の 23.53 から 24.35 へ、0.82 ポイントの得点の上昇が見られた (図 6)。

図 6 「身体的能力」の得点推移 (得点範囲 6-36 点)



以上のように、IKR 上位 3 指標である「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」のいずれにおいても、事前調査より事後調査の得点が高いという結果が得られた。

これらの指標はそれを構成する下位指標の数に違いがあるため、取り得る得点の範囲が異なっている。そこで、各指標の得点の高低やその増減幅を同一の基準で比較ができるよう、各指標の得点を 100 点満点になるように標準化したのが図 7 である。

図 7 得点を 100 点満点に標準化した場合の IKR 上位 3 指標の得点推移

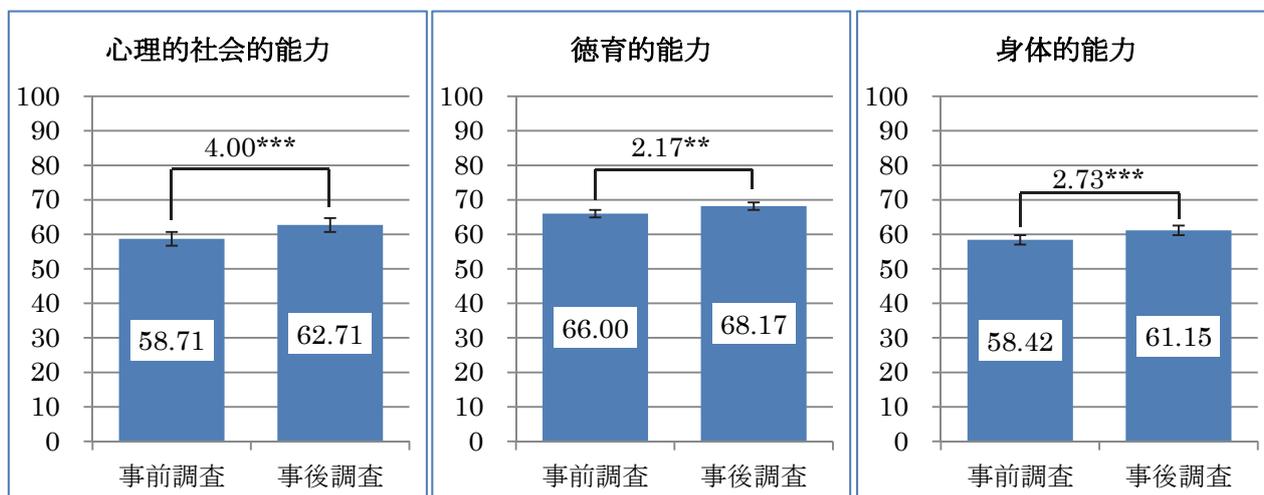


図 7 を見ると、事前調査、事後調査ともに最も得点が高かったのは「徳育的能力」であり、次いで「心理的社会的能力」、「身体的能力」となる。

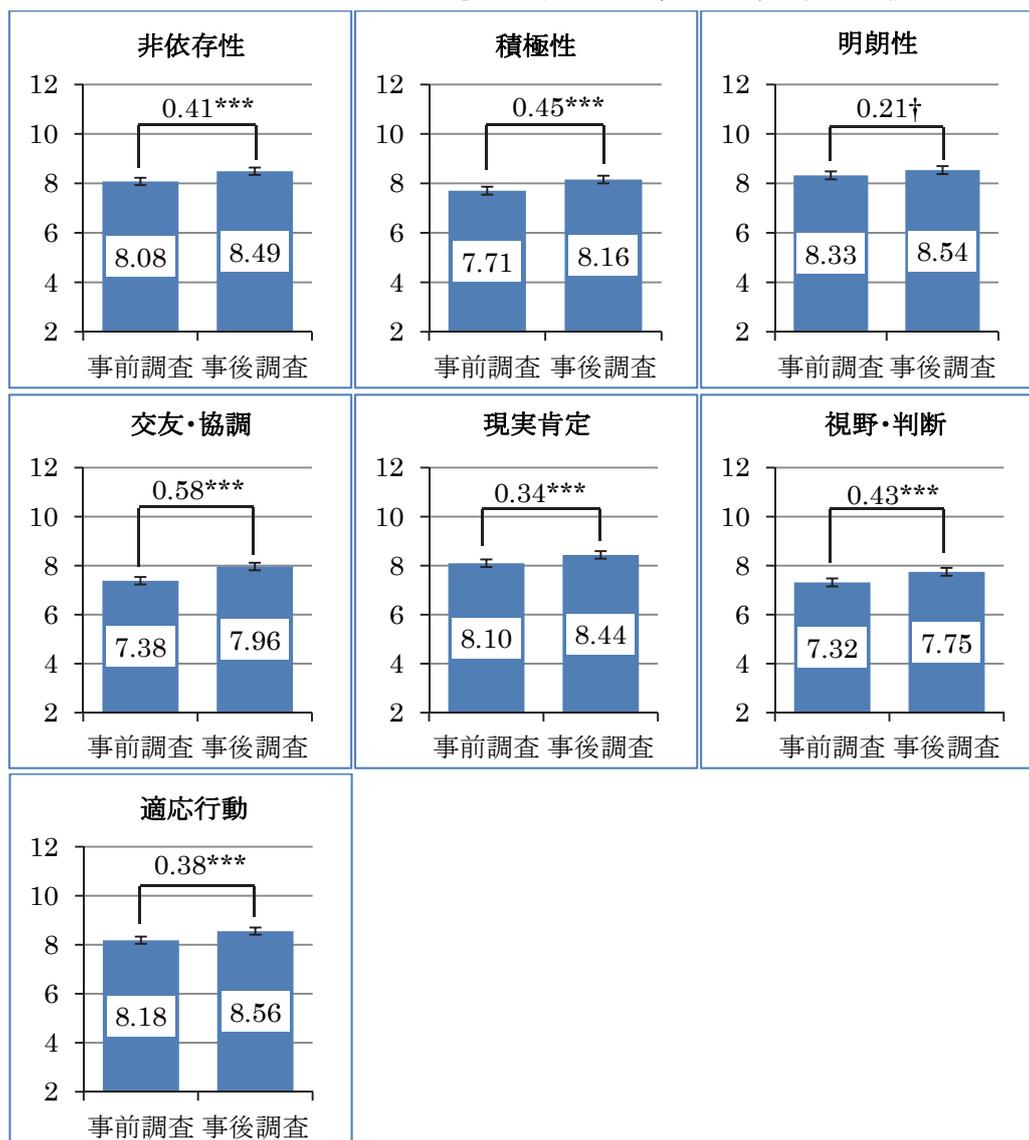
一方で、得点の向上幅が最も大きかったのは「心理的社会的能力」であり、次いで「身体的能力」、「徳育的能力」と続く。

## ② IKR 下位 14 指標の事前調査・事後調査比較

では、各上位指標を構成する下位指標の得点推移はどうか。

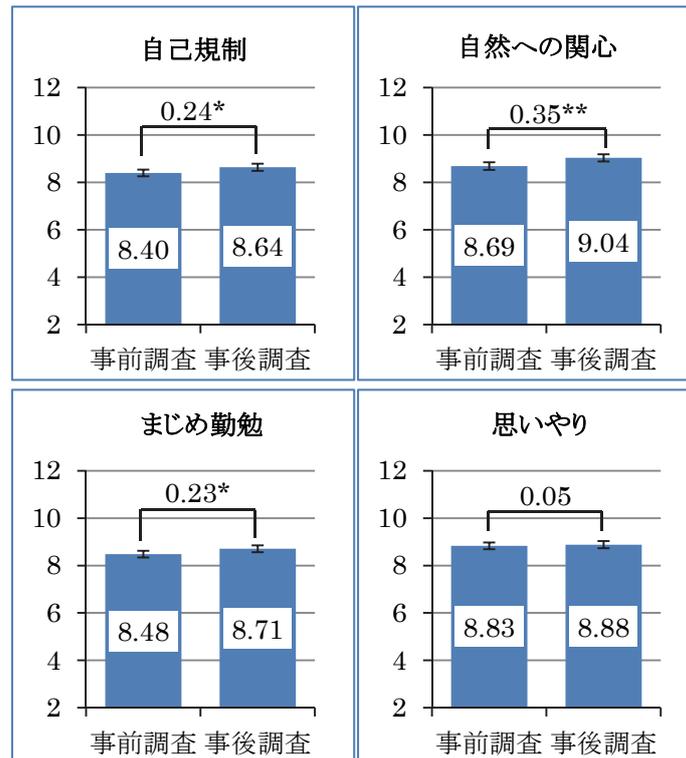
「心理的社会的能力」を構成する下位指標である「非依存性」「積極性」「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」の得点推移は図 8 のとおりであり、全ての指標において得点が上昇していることが分かる。最も得点の向上幅が大きいのは「交友・協調」(0.58 ポイント増)であり、次いで「積極性」(0.45 ポイント増)、「視野・判断」(0.43 ポイント増)、「非依存性」(0.41 ポイント増)となっている。

図 8 「心理的社会的能力」を構成する下位 7 指標の得点推移



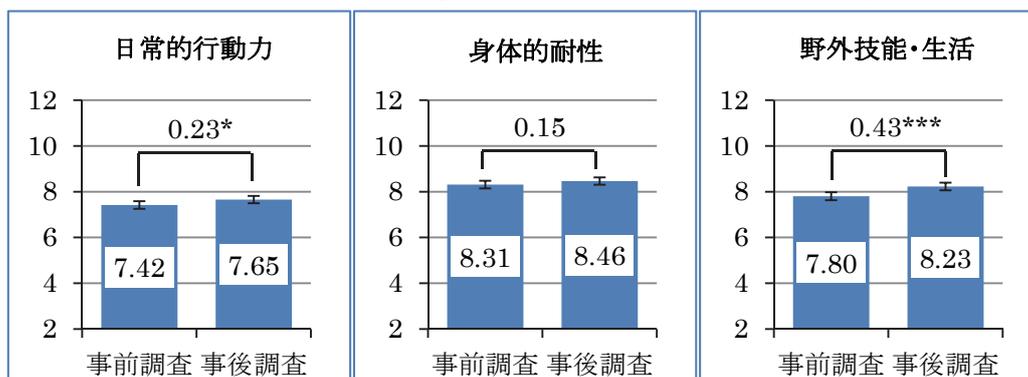
次に、「徳育的能力」を構成する下位指標である「自己規制」「自然への関心」「まじめ勤勉」「思いやり」の得点推移を見てみると(図 9)、「自然への関心」の得点の向上幅が最も大きく(0.35 ポイント増)、「自己規制」(0.24 ポイント増)、「まじめ勤勉」(0.23 ポイント増)がそれに続いている。

図 9 「徳育的能力」を構成する下位 4 指標の得点推移



最後に、「身体的能力」を構成する下位指標である「日常的行動力」「身体的耐性」「野外技能・生活」の得点の推移を見てみると（図 10）、「野外技能・生活」の得点の向上幅が最も大きく（0.43 ポイント増）、次いで「日常的行動力」（0.23 ポイント増）となっている。

図 10 「身体的能力」を構成する下位 3 指標の得点推移



以上のように、事前調査から事後調査にかけて、指標によって得点の向上幅に差はあるものの、全ての IKR 下位指標について得点の向上が見られた<sup>7</sup>。特に得点が大きく向上したのは、「交友・協調」「積極性」「視野・判断」「野外技能・生活」「非依存性」「適応行動」「自然への関心」である。「交友・協調」の得点の向上からは、移動教室における自然の中での集団生活、集団行動が児童の社会性に好影響を与えたことが窺える。また自然の中での活動を通し「自然への関心」が高められたことが分かる。移動教室における自然体験は、その活動の様々な側面を通じて、児童の生きる力を向上させていると言えよう。

<sup>7</sup> なお、「思いやり」「身体的耐性」については、統計的な有意差は認められなかった。

## (2) 分析と考察

### ① 自然への気づき

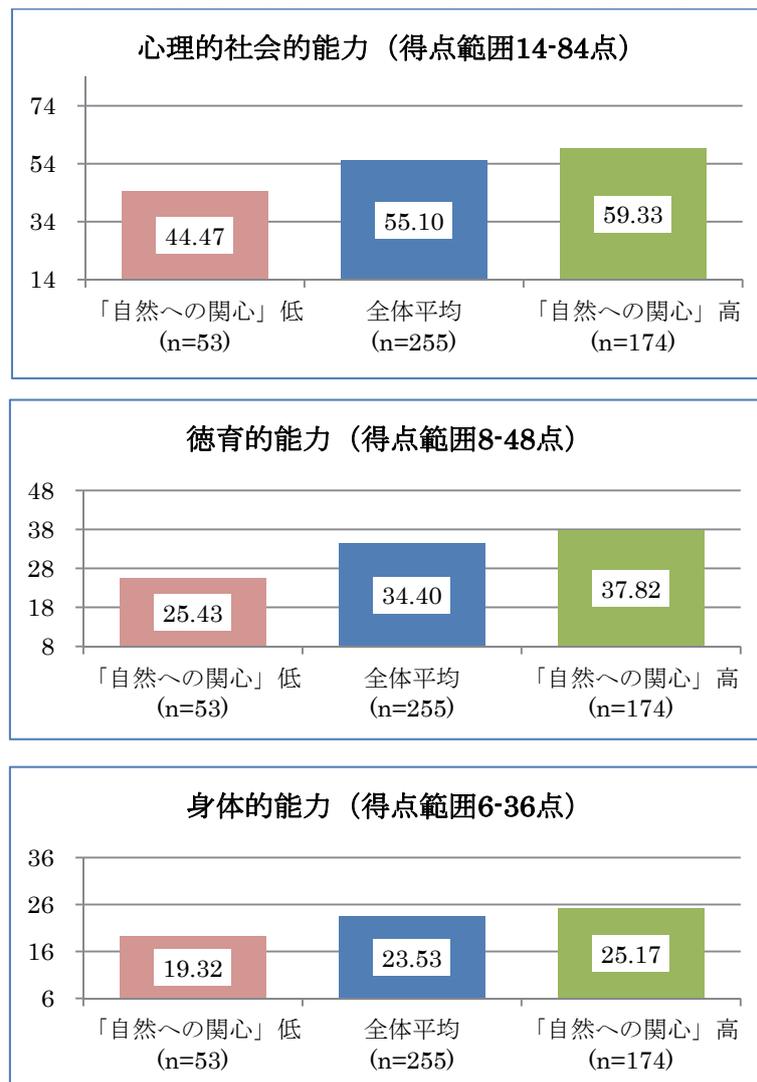
第I章で触れたように(4頁参照)、自然体験においては、身近な自然への気づき、いわば自然への感性が重要になる。自然への感性が磨かれることによって、それまでは自然体験と認識していなかった様々な活動の中に自然とのふれあいの機会を見出すことができるようになり、より豊富な体験の機会を得ることができるようになると考えられるからである。

そこで本項では、IKR 下位指標の内、特に「自然への関心」の指標に焦点をあてて、分析を行うこととした。なお、「自然への関心」は「花や風景などの美しいものに、感動できる」と「季節の変化を感じることができる」の2つの設問(いずれも1点から6点の6段階評価)から構成されるものであり、得点範囲は2-12点である。

事前調査で「自然への関心」の得点が高い児童(得点範囲:8-12点)と低い児童(得点範囲:2-6点)のIKR 上位3指標(「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」)の得点を、有効回答全体の平均とともに示したのが図11である。

事前調査で「自然への関心」の得点が高い児童は、いずれの上位指標においても高い値を記録している。一方、「自然への関心」の得点が高い児童は、いずれの上位指標においても低い値となっている。

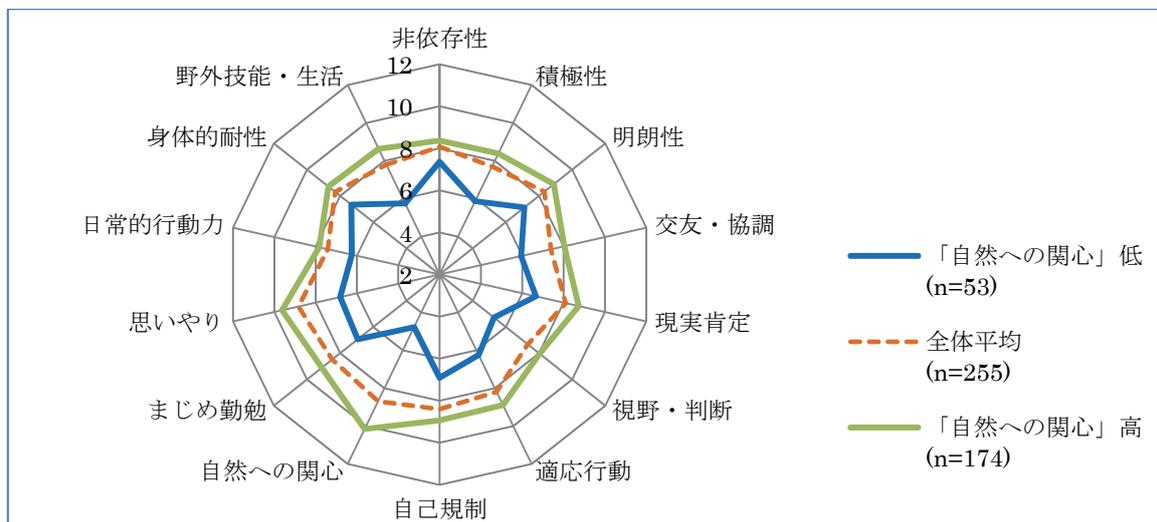
図11 「自然への関心」の高低別 IKR 上位3指標の得点比較(事前調査)



次に、各下位指標との関連を見てみると（図 12）、「自然への関心」が高い児童、つまり自然に対する感性が高い児童ほど、「生きる力」を構成する様々な指標の値も高い傾向にあることが見て取れる。

なかでも「野外技能・生活」「思いやり」「視野・判断」「適応行動」「積極性」は、「自然への関心」が高い児童と低い児童の差が特に大きくなっており、「自然への関心」と深い関連を持っていることが窺える。

図 12 IKR 下位 14 指標の得点比較（事前調査）

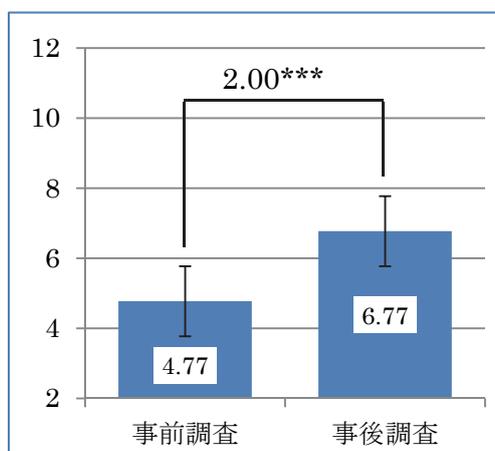


※得点の詳細については 17 頁の表 5、表 6 を参照

ここまで、事前調査における「自然への関心」の得点に着目し、それが同じく事前調査の他の指標の得点とどのような関連があるか見てきた。では、「自然への関心」が低い児童の得点は、移動教室の前後でどのように変化したのだろうか。

事前調査で「自然への関心」の得点が低かった児童について、「自然への関心」の得点推移を見てみると（図 13）、事前調査の 4.77 から事後調査では 6.77 と、2.00 ポイントもの大きな向上が見られた。これは移動教室が自然への感性を大きく改善させることを示唆している。

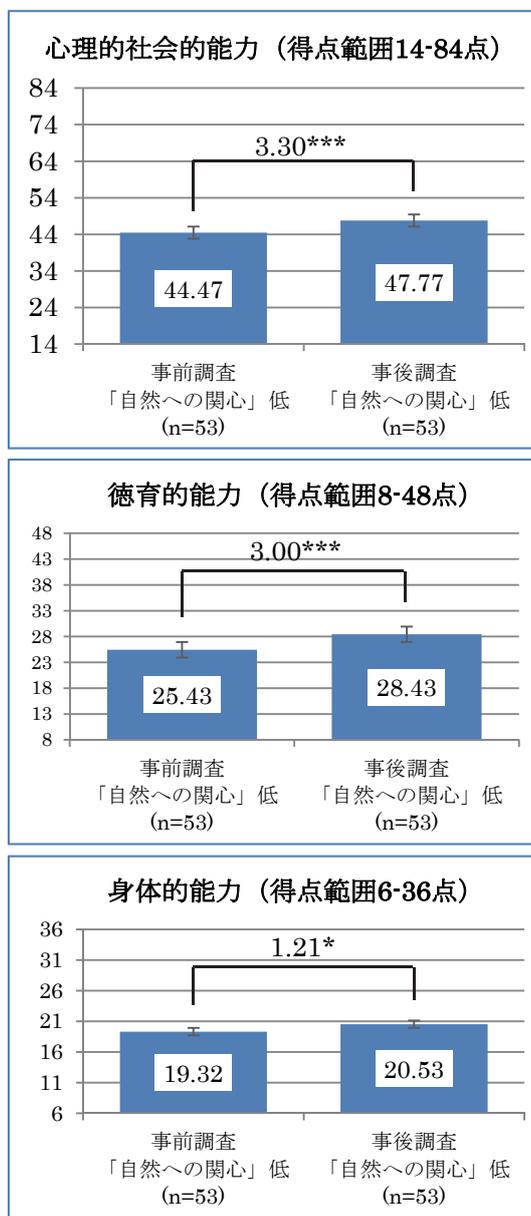
図 13 「自然への関心」が低かった児童（2-6 点）の「自然への関心」の得点推移



また、図 14、図 15 で見ると、その他の各指標の得点にも一定の改善が見られた。

まず「自然への関心」が相対的に低い児童の上位指標の得点推移を見てみると（図 14）、「心理的社会的能力」では 3.30 ポイント、「徳育的能力」では 3.00 ポイント、「身体的能力」では 1.21 ポイントの上昇が認められた。

図 14 「自然への関心」が低かった児童（2-6 点）の IKR 上位 3 指標の得点推移



また、事前調査で「自然への関心」が低かった児童と高かった児童のそれぞれについて、14 個の下位指標の得点推移を表したのが図 15 と表 5、表 6 である。

事前調査において「自然への関心」が低かった児童は、移動教室の前後で「自然への関心」以外にも、特に「交友・協調」や「野外技能・生活」「視野・判断」「自己規制」といった指標で大きく得点を向上させている<sup>8</sup>。「自然への関心」が低かった児童の移動教室前後でのこれらの項目の得点の伸びは、「自然

<sup>8</sup> なお、事前調査で「自然への関心」が低かった児童の「幸福実感」は、事前調査が 7.13、事後調査が 7.43 であり、0.26 ポイントの向上が見られた。一方、事前調査で「自然への関心」が高かった児童の「幸福実感」は、事前調査が 8.34 から事後調査が 8.43 であり、得点の向上幅は 0.08 ポイントであった。

への関心」が高かった児童の得点の伸びに比べて大きい。

これらの結果は、移動教室における自然体験が、児童にとって自然に関心を抱かせる大きなきっかけとなっていること、また自然への感性を磨くことを通して児童がより多くの体験の機会を得、それが間接的に生きる力の涵養を促していることを示唆していると言える。

図 15 事前調査における「自然への関心」の高低別、IKR 下位 14 指標の得点推移

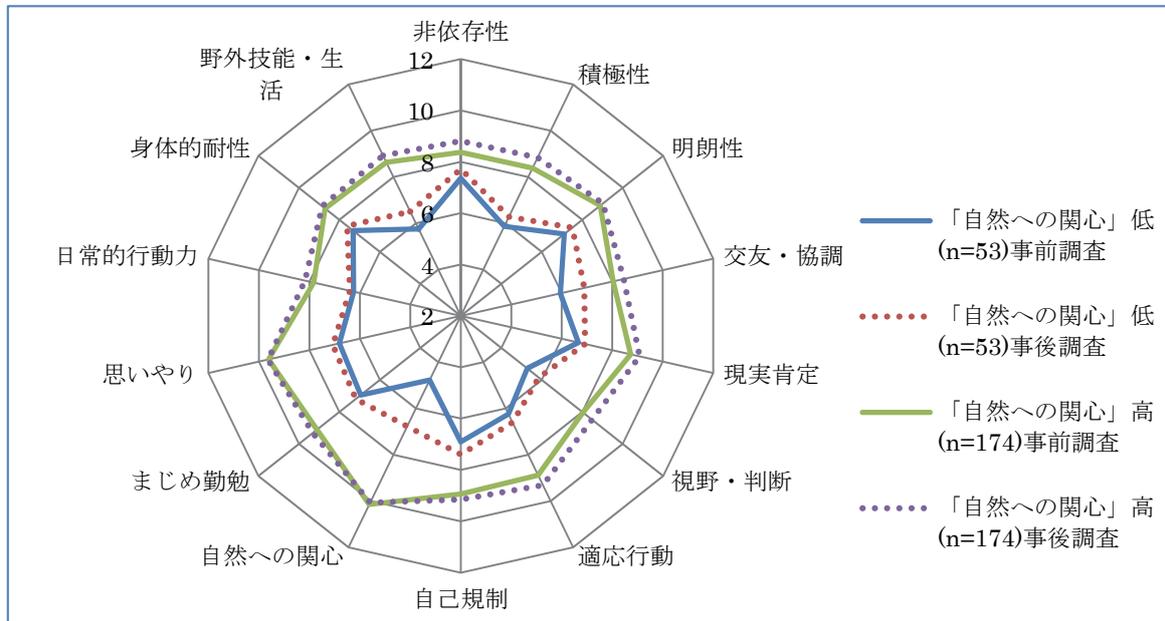


表 5 事前調査で「自然への関心」が低かった児童の IKR 下位 14 指標得点推移

	非依存性	積極性	明朗性	交友・協調	現実肯定	視野・判断	適応行動	自己規制	自然への関心	まじめ勤勉	思いやり	日常的行動力	身体的耐性	野外技能・生活
事前	7.36	5.87	7.11	5.94	6.66	5.28	6.25	6.91	4.77	6.94	6.81	6.25	7.32	5.75
事後	7.72	6.28	7.51	6.89	6.92	5.85	6.60	7.40	6.77	7.19	7.08	6.40	7.62	6.51
差	0.36	0.42	0.40	0.94	0.26	0.57	0.36	0.49	2.00	0.25	0.26	0.15	0.30	0.75

表 6 事前調査で「自然への関心」が高かった児童の IKR 下位 14 指標得点推移

	非依存性	積極性	明朗性	交友・協調	現実肯定	視野・判断	適応行動	自己規制	自然への関心	まじめ勤勉	思いやり	日常的行動力	身体的耐性	野外技能・生活
事前	8.37	8.39	8.89	8.03	8.73	8.03	8.89	8.94	10.15	9.11	9.62	7.83	8.71	8.63
事後	8.81	8.84	9.02	8.45	9.08	8.48	9.31	9.15	10.07	9.32	9.64	8.18	8.86	8.93
差	0.44	0.45	0.13	0.42	0.35	0.44	0.43	0.21	-0.08	0.21	0.02	0.35	0.15	0.30

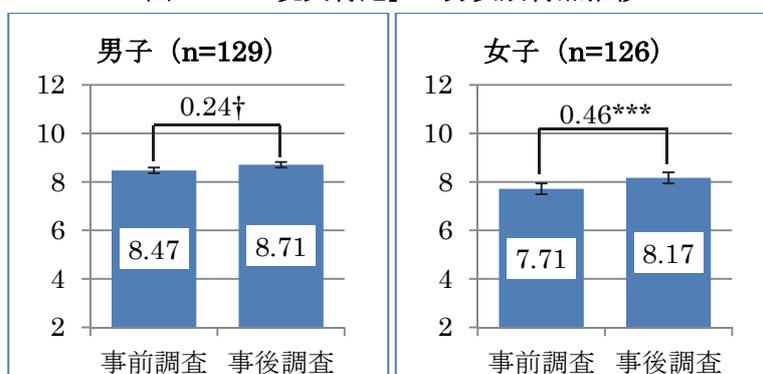
## ② 自律性および社会性の向上

ライフサイクル理論を提唱したことで知られる米国の心理学者エリクソンは、学童期（6-11 歳頃）の発達課題として勤勉性の獲得と劣等感の克服を、また青年期（12-18 歳頃）の発達課題として自我同一性（アイデンティティ）の獲得を挙げている（Erikson 1959; 1963）。また、児童が将来、自律的な個人として、また社会の一員として活躍していくためには、他人に依存することなく自ら主体的に考え判断を行うこと、また自己規制（セルフ・コントロール）の能力を発展させ、社会に適応し、友人と交友関係を結びながら協調して行動することが求められる。

「心理的社会的能力」と「徳育的能力」を構成する IKR 下位指標のいくつかは、劣等感の克服やアイデンティティの確立、自律性・社会性の獲得といった発達課題の問題と密接に結び付いている。

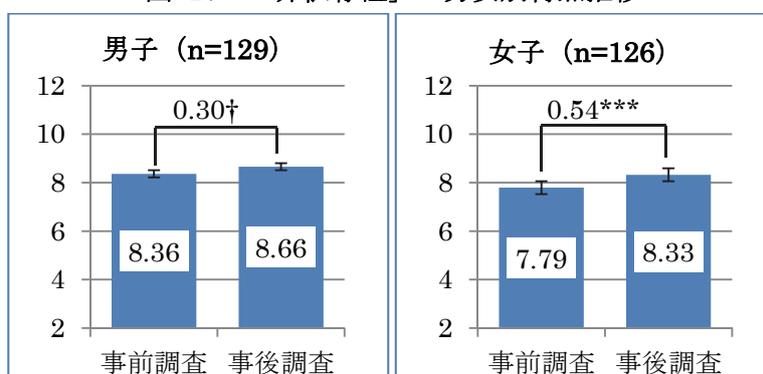
その一つ「現実肯定」を見ると、事前調査と事後調査で、男子が 8.47 から 8.71 へ 0.24 ポイント、女子では 7.71 から 8.17 へ 0.46 ポイントの得点の向上が見られた（図 16）。男子女子ともに、移動教室が児童の現実肯定感を育むのに役立っていることが分かるが、女子の得点の向上幅は男子のおよそ 2 倍となっており、特に女子児童の現実肯定感が大きく向上している。

図 16 「現実肯定」の男女別得点推移



また、「非依存性」の得点を見てみると、事前調査と事後調査で、男子が 8.36 から 8.66 へ 0.30 ポイント向上したのに対し、女子は 7.79 から 8.33 へ 0.54 ポイント向上しており、男子よりも女子の方が 0.24 ポイント、向上幅が大きかった（図 17）。

図 17 「非依存性」の男女別得点推移



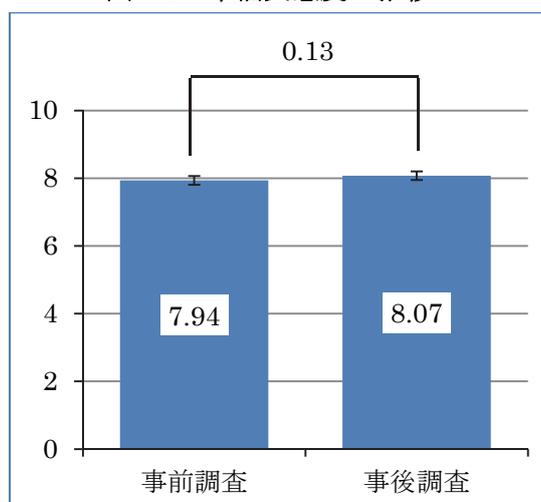
このような男女差を生じさせる原因が何であるかについては、社会的・文化的な要因を含め、様々な要素の影響を考慮する必要がある。いずれにせよ、検討に値する調査結果であると言える。

### ③ 幸福度との関係

本章冒頭でも示したように、本調査では「生きる力」に関する設問に加え、児童の幸福実感に関して0-10の11件法で尋ねている。

今回の調査において児童の幸福実感の平均値は、事前調査で7.94、事後調査で8.07であり、8点を中心に安定した値が得られた(図18)。事前調査と事後調査で0.13ポイント得点の向上が見られたが、統計的に有意な差ではなく( $p=.128$ )、したがって、今回の調査結果から移動教室が短期的な幸福実感の向上をもたらすと言うことは難しい。この調査結果は、カミンズとニスティコ(Cummins & Nistico 2002)やカミンズら(Cummins et al. 2014)等の主張する幸福度のホメオスタシス効果を巡る研究から予測されるとおりのものである。

図18 幸福実感度の推移



しかし、この結果は、移動教室ないし自然体験が幸福実感の向上と無関係であることを意味するものではない。

実際、事前調査、事後調査のそれぞれにおいて、幸福実感度とIKR上位3指標の相関を見ると、表7のような結果が得られた。

表7 幸福実感度とIKR上位3指標との相関

	心理的社会的能力	徳育的能力	身体的能力
幸福実感度との相関係数 (事前調査)	.411 ***	.401 ***	.269 ***
幸福実感度との相関係数 (事後調査)	.486 ***	.503 ***	.314 ***

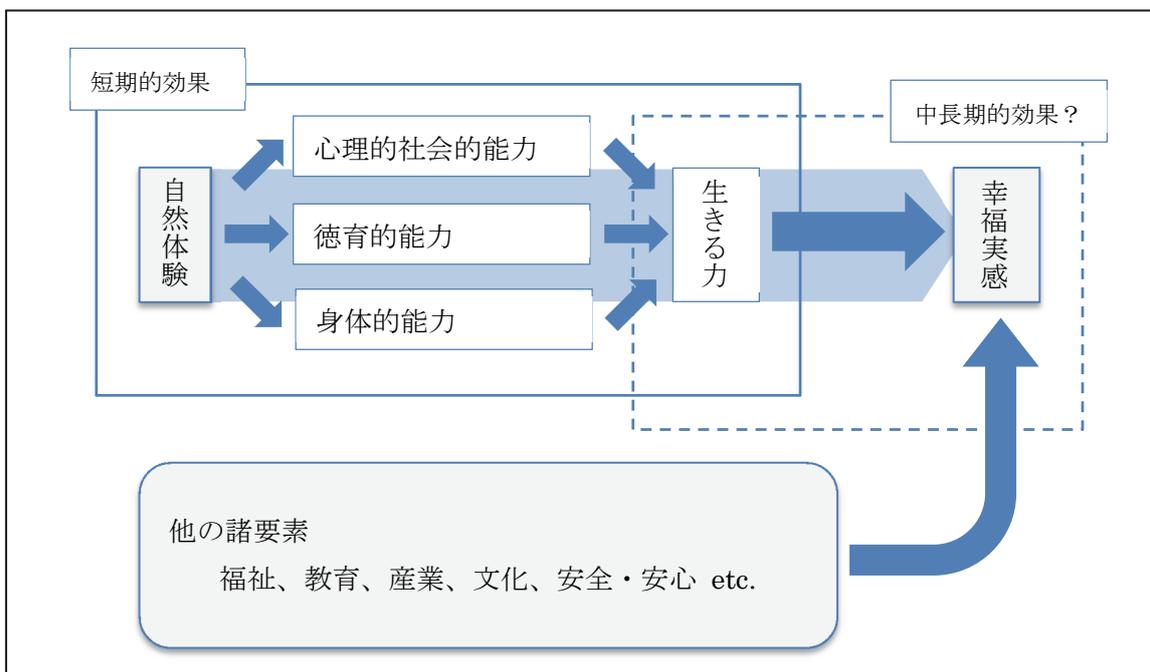
事前調査では、幸福実感度とIKRの「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」との相関係数は、それぞれ0.411、0.401、0.269であった。また同様に、事後調査ではそれぞれ0.486、0.503、0.314であった。

事前調査、事後調査を通じて、幸福実感度は「心理的社会的能力」と「徳育的能力」との間に一定の相関を、「身体的能力」との間に弱い相関を有している。これは、「心理的社会的能力」や「徳育的能力」「身体的能力」が児童の幸福実感を構成する要素の一部であり得るということ、すなわち生きる力の向上が幸福実感に正の影響を与えることを示している。

幸福実感は我々の様々な活動や環境、文化的・社会的背景が複雑に絡み合った結果として得られるものであり、決して単一の（あるいは少数の）要因によって規定されるものではない。その意味で、生きる力もまた、幸福という幅広い観点から見れば、あくまでそれを構成する諸要因の一部に過ぎないのである。

とはいえ、幸福実感度と生きる力との間の相関関係を明らかにしたことは、幸福度研究においても一つの前進であったとすることができるだろう。そして、目下の課題としての子どもの健全育成という点からは、今回の調査結果は、生きる力の涵養が短期的な幸福実感度の向上にはつながらないとしても、長期的には幸福実感度を向上させるという可能性を示すものであると言える（図 19）。

図 19 本調査から得られた生きる力の向上を基にした幸福実感向上の理論的モデル



長期的で漸進的な幸福実感の向上がどのようにして起きるかという問題は、本稿の主題を越えた、主観的幸福を研究する上での大きな問題であり、更なる調査を必要とする問題である。したがってこの点については、それを課題として指摘するに留めておくこととし、次に、荒川区の各種事業の体系整理とインタビュー調査の結果について論じることにはしたい。

### Ⅲ 荒川区の子ども達の自然体験をとりまく現状

(山田庄太郎)

#### 1 子どもの自然体験に係る体系整理

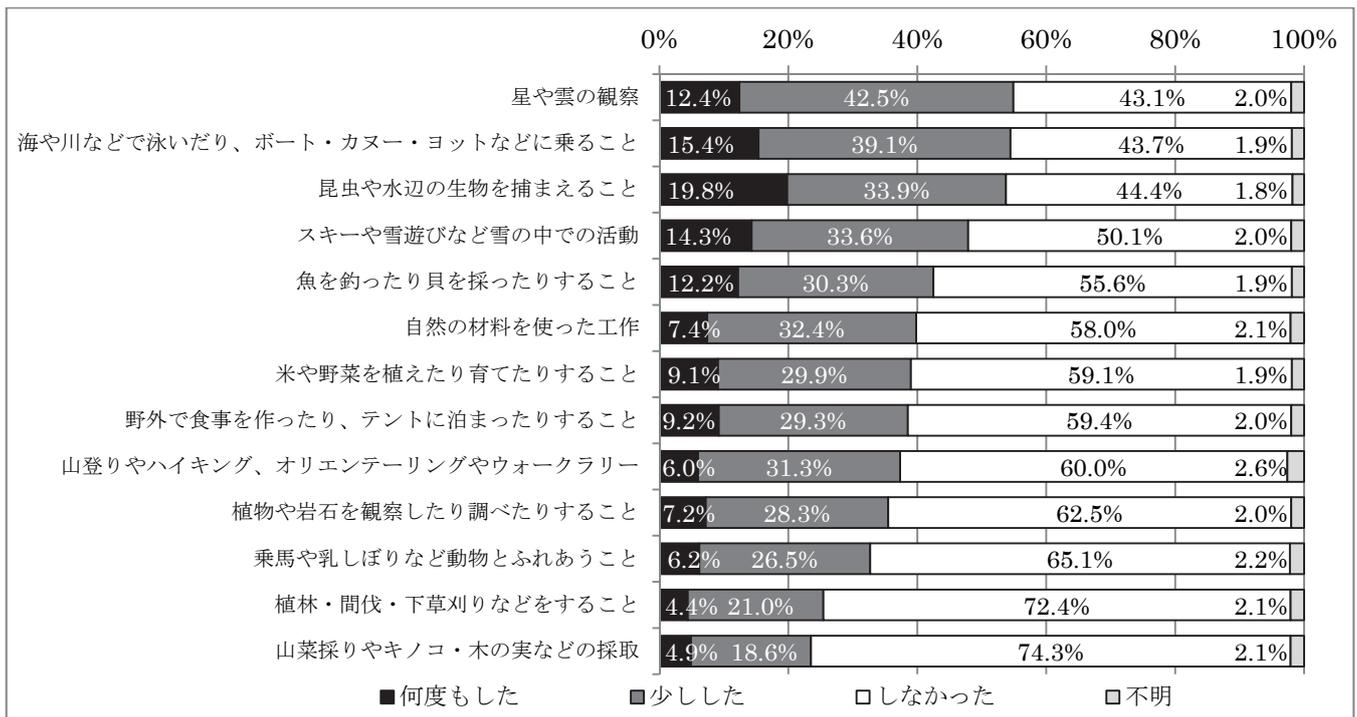
##### (1) 基本的視点

移動教室で実施したアンケート調査からは、自然体験が子どもの生きる力を育むことが分かった。

荒川区内の各学校では、現在、移動教室の他にも、理科教育における実験・観察、校内での各種動植物の飼育・栽培などを通して、子どもが自然と親しむ様々な機会を提供している。

一方、青少年教育振興機構（2014）が2013年に小学1年生から6年生、中学2年生、高校2年生を対象に行った調査によると、学校の授業や行事以外で自然体験活動を行ったことがある人は少ない。2012年4月から2013年2月までの間に「山菜採りやキノコ・木の実などの採取」を学校の授業や行事以外で行ったことがあると答えた児童・生徒は全体の23.5%に留まり、74.3%が一度もしなかったと答えている。また、同様に「野外で食事を作ったり、テントに泊まったりすること」をしたことがあると答えた児童・生徒は38.5%に留まり、したことが無いと答えた児童・生徒の割合は59.4%にのぼった<sup>9</sup>（図20）。

図20 学校の授業や行事以外の自然体験活動



青少年教育振興機構（2014: 57）

この調査からは、子ども達にとって学校以外での自然体験の機会がきわめて限られていることが窺われる。こうした状況の中で、区の自然体験事業に対する期待は当然大きなものがある。

そこで本章では荒川区が主体となって、あるいは民間団体等と協力して実施している各種事業（補助事業を含む）について振り返り、子ども達に学校以外の場で区がどのような自然体験の機会を提供して

<sup>9</sup> 回答は中学生以上は自己報告に、小学生については保護者の報告による。

いるのか体系整理を行った上で、どのようにすればより効果的に子どもの自然体験の機会を増やすことができるのかについて考察を加えることにしたい。

## (2) 平成 27 年度自然体験関連事業一覧

自然体験関連事業の体系整理のための準備的作業として、荒川区および荒川区教育委員会の各所管課に対し、自然体験に関連するものとしてどのような事業を実施しているかを尋ね、平成 27 年度の自然体験関連事業を一覧としてまとめる作業を行った。

調査対象としたのは自然体験に関連する各種事業の主たる担い手である以下の各課である。なお、区内の小中学校等では、移動教室に限らず、学校ごとに独自に児童・生徒に対して様々な自然体験の機会を提供しているが、上述のように本レポートの目的は学校以外の場での自然体験事業の充実にあるため、各学校における自然体験のための個々の取り組みについては調査対象としなかった。ただし、校外学習施設の整備等、一義的には区が対応すべき課題について把握するため、荒川区教育委員会の学務課が所管する事業および指導室が実施する移動教室については今回の調査範囲に含めている。

自然体験関連事業の取りまとめに係る調査先の一覧は以下のとおりである。

表 8 自然体験関連事業の取りまとめ調査先一覧

荒川区	区民生活部	地域振興課
	地域文化スポーツ部	文化交流推進課
		生涯学習課
		スポーツ振興課
	環境清掃部	環境課
	子育て支援部	児童青少年課
保育課		
防災都市づくり部	道路公園課	
荒川区教育委員会		学務課
		指導室

第 I 章 3 節で触れたように、「自然」および「自然体験」の語が指し示す語の範囲は幅広い。また、活動の目的についても、自然とのふれあいを目的としたものから、環境教育を目的としたもの、体力向上を目的としたものまで非常に多様である。たとえば同じ工作遊びでも、落ち葉や木の枝を使いながら、それらが自然に由来するものであることを意識して工作を行うのであれば、当然自然体験に含まれてくるであろうし、運動会や体育祭のように自然の中で活動が行われていてもその活動が特に自然との接点を意識するものでなければ、それが自然体験であるとは言い難いであろう。またこれらの中には、判断の難しい様々な事例が含まれる。

そうした事例の中には、ある参加者はそれを自然体験であると考えても、別の参加者はそのように考えないものも含まれてくるだろう。第 I 章で述べたように（4 頁参照）、自然体験の特徴は、それに関連する活動が必ずしも自然とのふれあいを直接の目的としていない場合が多いところにある。周囲の自然に気付き、いかにしてそれとふれあい、どのような体験をするかは、個々の参加者や運営者の意識にかなりの程度依存する。その意味で、何を自然体験と呼ぶかは必ずしも一意に決定されるものではない。

そこで各所管課に対しては、該当課において自然体験という観点を取り入れて実施していると考えられる全ての事業について、その全てを挙げてもらいここで一覧としてとりまとめた上で、本節第 3 項で改めて自然体験の体系整理を実施することとした。

表 9 荒川区の自然体験事業一覧（平成 27 年度）

①所管課	②事業名	③対象者	④事業の目的	⑤事業概要
地域振興課 石浜ふれあい館	石浜トリップ	高齢者限定	高齢者の健康増進を図る。	季節に合わせた場所を選択し、遠足や散歩を実施。
	浜っこガーデナーウィッシュ	小学1年生～ 小学6年生	草花を育てることにより、自然に触れ優しい心を育てる。	ふれあい館敷地内において草花を育てる。
	浜っこスポーツウィッシュ	小学1年生～ 小学6年生	スポーツ活動を通し、心身の向上を図るとともに、活動の中に地域のごみ拾いを取り入れることで自然環境にも関心を持たせることを目的とする。	ランニング等の屋外で実施するスポーツプログラムの中に、地域のごみ拾い等の環境学習の機会を組み入れ、自然環境を学ぶ機会を提供している。
	デイキャンプ	小学1年生～ 小学6年生	スイカ割りやドジョウつかみなどデイキャンプを通して自然とのふれあいの機会を提供する。	ふれあい館全館を使用してキャンプごっこを行うデイキャンプに、スイカ割りやドジョウつかみなど自然にふれあう機会を取り入れている。
地域振興課 南千住ふれあい館	【H.27 充実】 乳幼児タイム： 公園遊び	乳幼児(2歳児)とその保護者	公園で自然とふれあいながら様々な活動を楽しむ。	天王公園ですべり台やシャボン玉遊び、ふれあい遊びを親子で行う。
	【H.27 充実】 デイキャンプ： 遠足	小学1年生～ 小学4年生	夏休みの3日間、小屋作りや遠足に行く等の様々な体験を通し友達と協力する大切さを学ぶ。	デイキャンプ2日目に、上野の国立科学博物館に行き、班行動で見学する。
	【H.27 充実】 乳幼児タイム： 屋上遊び	乳幼児とその保護者	ふれあい館の屋上で自然とふれあいながら普段の乳幼児タイムとは一味違った活動を楽しむ。	屋上に咲いている「しばざくら」を鑑賞しながら、チョーク遊びやシャボン玉遊びを親子で楽しむ。
	クラフトタイム：落ち葉でスタンプ～スパッタリング～	乳幼児～ 小学6年生	創作室での活動「クラフトタイム」の中で乳幼児親子から小学生を対象に、自然の落ち葉を利用して工作を行い、自然への興味関心を養う。	子ども達がそれぞれ見つけてきた落ち葉をもとに、絵の具をつけて、スパッタリングで工作してもらい、作品を作る。
地域振興課 南千住駅前ふれあい館	【H.27 充実】 不思議クラブ DX:エキスポセンター遠足	小学1年生～ 小学6年生	身近な自然や環境について楽しみながら学び体験する。	定例的に実施している身近な科学をテーマとした不思議クラブのDX版。
	【H.27 新規】 あらかわエコセンター見学	小学1年生～ 中学3年生	身近な自然や環境について楽しみながら学び体験する。	あらかわエコセンターを訪問し、同センターの見学コーナーを活用し、環境学習を実施した。
	【H.27 充実】 野菜の栽培	小学1年生～ 小学6年生	栽培の楽しさを体験する。	ふれあい館が入居するビルの敷地を借用し、クリスマス会に向けて野菜を栽培する。
地域振興課 汐入ふれあい館	高学年キャンプ	小学4年生～ 小学6年生	自然体験や生活体験を通し、豊かな心と体力の増進を図ることを目的とする。	奥多摩鳩ノ巣バンガローで川遊び、ハイキング、野外炊事、宿泊を実施する。
	低学年キャンプ	小学1年生～ 小学3年生	自然体験や生活体験を通し、豊かな心と体力の増進を図ることを目的とする。	アスレチック遊び、ハイキング、野外炊事、宿泊を実施する。
	大人のおでかけ	一般・高齢者限定	遠方へのお出かけを通し、体力と健康の増進を図る。	夢の島熱帯植物園や清澄庭園など、自然環境に親しめる場所へのお出かけを実施する。
	山登り	小学3年生～ 小学6年生	自然体験を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	高尾山にて山登りを実施する。
	【H.27 新規】 サマーソルティ (小学生クラブ 夕涼み会)	小学1年生～ 小学6年生	幼稚園園庭を借り、小学生を対象に、屋外・野外での自然体験活動を行う。	南千住第2幼稚園園庭を用い、屋外レクリエーションゲーム、花火などを実施した。

①所管課	②事業名	③対象者	④事業の目的	⑤事業概要
地域振興課 峡田ふれあい館	わくわくチャレンジキャンプ	小学2年生～ 高校生	自然体験や生活体験を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	山梨県小菅村の平山キャンプ場で、キャンプを実施。中高生がリーダーとなり他区の子ども達とともに、キャンプファイヤーや川遊びを実施する。
地域振興課 荒川山吹ふれあい館	乳幼児タイムにおける散歩や遠足	乳幼児とその保護者	屋外での活動を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	公園などの自然の中で活動を行い、駆け回ったり遊んだりして親子で身体を動かす。
	【H.27新規】 マラソン大会	小学1年生～ 小学6年生	屋外の活動を通し、最後までやり遂げる力を養う。	身近な自然のなかで、競い合いながら完走をめざす。
	【H.27新規】 冬の遠足	小学1年生～ 小学6年生	冬ならではの季節を楽しむ。	NHK放送センターと代々木公園を訪問する。公園で散歩したり遊びながら咲いている花などの観察を行う。
地域振興課 町屋ふれあい館	町ふれんず「自然体験ボランティア」	小学1年生～ 小学2年生	子ども達が種から花を栽培することにより自然とふれあう楽しさを知る。	ボランティアとは何かについて話をした上で、種から花を咲かせる方法を学び、実際に種まきや水やりを行う。
	町ふれんず「飛鳥山公園デイキャンプ」	小学1年生～ 小学2年生	自然とふれあいながら、思いっきり遊ぶ。	自然と遊ぶ時の注意事項について話をした上で、公園で遊びながら咲いている花等の観察を行う。
	町ふれんず「エコセンター見学デイキャンプ」	小学1年生～ 小学2年生	ヤゴを実際に触ったり虫探しを行いながら、環境問題について学ぶ。	あらかわエコセンターで実際にヤゴに触れ、自然に親しむとともに、自然破壊についてのビデオを観賞するなどして、環境問題について学ぶ。
	町ふれんず「オータムキャンプ」	小学1年生～ 小学6年生	普段体験できない自然とのふれあいを体験し、自然の中で過ごすことの楽しさを感じる。	アスレチック活動や小動物とのふれあいを楽しみながら、自炊を通じた食育等を行う。
地域振興課 荒木田ふれあい館	幼児タイム遠足	乳幼児とその保護者	屋外での活動を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	公園などの自然の中で活動を行い、駆け回ったり遊んだりして親子で身体を動かす。
	MJキッズ遠足	幼稚園児・保育園児	屋外での活動を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	1年間一緒に活動した仲間達との思い出作りのため、遠足に行く。
地域振興課 尾久ふれあい館	わくわくふれあいキャンプ	小学3年生～ 高校生	自然体験や生活体験を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	八王子市夕やけこやけふれあいの里キャンプ場でキャンプを行う。中高生が班のリーダーとなり、他区の子ども達とともに、キャンプファイヤーや川遊びを実施する。
	尾久の原公園であそぼう	小学1年生～ 小学6年生	屋外での工作や集団遊びを通し、豊かな心と体力の増進を図る。	ボーイスカウトのイベントに参加し、屋外で工作や集団遊びを楽しむ。
地域振興課 西尾久ふれあい館	乳幼児タイムにおける散歩や遠足	乳幼児とその保護者	屋外での活動を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	公園などの自然の中で活動を行い、駆け回ったり遊んだりして親子で身体を動かす。
	パパとあそぼう「さつま芋の苗植え」「収穫祭」	乳幼児とその保護者	ふれあい館のベランダに設置した花壇を利用し、親子で自然に親しむことを目的とする。	子ども達が土に親しみながら、パパと一緒にさつま芋づくりを体験する。秋に収穫し、収穫祭を行なう。
	乳幼児タイムにおける「野菜の栽培と収穫」	乳幼児とその保護者	ふれあい館のベランダの花壇を利用してミニトマト・きゅうり等の野菜の栽培を行い、植物の成長を身近に感ずることを目的とする。	登録制幼児タイムの事業の一環として、春に野菜の苗を植える。水やり等をしながら、野菜の成長をも見守る。来館時に野菜を収穫し、収穫の喜びと自然の力を知る。
地域振興課 東日暮里ふれあい館	乳幼児タイムにおける散歩や遠足	乳幼児とその保護者	屋外での活動を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	公園などの自然の中で活動を行い、駆け回ったり遊んだりして親子で身体を動かす。
地域振興課 西日暮里ふれあい館	乳幼児タイムにおける散歩や遠足	乳幼児とその保護者	屋外での活動を通し、豊かな心と体力の増進を図る。	公園などの自然の中で活動を行い、駆け回ったり遊んだりして親子で身体を動かす。

①所管課	②事業名	③対象者	④事業の目的	⑤事業概要
文化交流推進課	国際交流バスハイク (補助事業)	小学1年生以上	区内の日本人と外国人が相互に交流を深めるとともに、訪問都市の魅力に参加者に知ってもらう。	ハイキングや果物狩り
	交流都市交流事業 (補助事業)	一般	荒川区の交流都市を訪問し、その自然や人々とふれあい、交流を促進する。	ハイキングや果物狩り
生涯学習課	チャレンジ共和国(荒川区少年団体指導者連絡会共催)	小学3年生～ 中学3年生	直接体験と異年齢交流の機会を提供し、学校以外のつながりを作り、自発的な地域活動の基礎づくりをする。	火おこし・工作・レクリエーション・ 野外調理等を実施。
	少年キャンプ (補助事業)	小学3年生～ 中学3年生	集団生活や野外活動を通じて協調性・生活能力・チームワーク等を学ぶ機会とする。	チャレンジ共和国参加者等を対象に 野外炊飯やハイキングなど、講座で実施した内容の現地体験を行う。
	子ども会大会 (補助事業)	子ども会加入者、チャレンジ共和国・キャンプ参加者	荒川区少年団体指導者連絡会加盟の団体(子ども会)の加入者と地域の子どもの交流を促進する。	ウォークラリーや野外調理等を実施。
	清里区民ハイキングツアー	一般	自然体験等を通じた心身の健全な育成及び健康増進。	清里施設や周辺の自然体験を含む区民ツアーを実施。
	青少年委員宿泊研修	青少年委員	体験活動や少年キャンプの指導者養成を目的とした研修を実施する。	ウォークラリーや追跡ハイキング、キャンプ等、実践を通じて効果的な教授方法を学ぶ。
	中高生リーダー養成講座	中学1年生～ 高校生	地域の青少年育成活動等において主体的に行動できる地域の青年リーダーを育成する。	27年度は、西日暮里公園において活動している団体の協力を得て、自然遊び(ロープワーク、木登り、昔遊び)の講習を実施。
スポーツ振興課	区民スキー教室	小学4年生以上	区民に対し、スキーに関する基礎技術の普及を図ることにより、安全に楽しみながら、健康増進、心身の健全な発達に資することを目的とする。	菅平高原スキー場で小学4年生以上の区内在住・在勤・在学の方を対象に、3泊4日でスキー教室を開催。初心者から上級者まで4つのクラスで荒川区スキー連盟の指導員が指導を行う。小学生のみ保護者同伴必須。
	区民ハイキング (補助事業)	小学1年生以上	区民が自然に親しみながら、心身の健全な発達及び健康増進に役立つことを狙いとする。	春(谷川岳)、秋(碓氷峠)の年2回ハイキングを実施。小学生のみ保護者同伴必須。
環境課	エコセンターのヤゴを捕まえよう	幼稚園児・保育園児以上	ヤゴの観察を通じて、都市部の生物多様性を学ぶ。	あらかわエコセンター3階のトロ舟ビオトープに生息しているヤゴを捕まえて観察する。
	夜の親子観察会「セミの羽化」	小学1年生～ 中学3年生とその保護者	セミの羽化を中心に観察し、夜の動物の生態を学ぶ。	荒川公園でのセミの羽化を中心とした親子観察会。
	昆虫を捕まえて観察しよう	幼稚園児・保育園児以上	昆虫採集の仕方、昆虫の生態を楽しく学ぶ。	毎年1回、9月頃に開催。会場は毎年変わる。定員30名。
	葛西臨海公園に行こう	幼稚園児・保育園児以上	干潟の生き物採集を通じて、海の生態系、干潟の大切さを学ぶ。	地球を守る区民会議として開催。会場・内容は毎年変わる。
	冬の星空観察	小学1年生以上	天体観察を通じて、宇宙・地球と環境について学ぶ。	上弦の月等、冬の星空をあらかわエコセンター屋上より望遠鏡で観察する。

①所管課	②事業名	③対象者	④事業の目的	⑤事業概要
児童青少年課	自然まるかじり体験塾 (補助事業)	小学4年生～ 中学3年生	自然の恵みや食物の大切さを学び、自立心や思いやりの心を育む。	年齢や学校が異なる2-5人の班に分かれ、千葉県鴨川市の農家に2泊3日のホームステイを行う。農家の一員として生活し農作業を行うほか、鴨川漁港において漁業体験を実施。
	公園巡回サポート事業	乳幼児とその保護者	友達作りの悩みを持つ保護者へのサポートを行うとともに、乳幼児が外遊びやお友達との遊びの楽しさを知るきっかけづくりを目的とする。	区内の公園(区立・都立)を巡回し、季節に見合った外遊び等を展開。また、あらかわ遊園では、各ひろば館ふれあい館の幼児活動参加者先着260組の親子を対象に、芝生広場に設置した5つのコーナーで制作やゲーム等を親子一緒に楽しむ遊びのツアーを展開する。
	花の木ひろば館「大竹さんと花あそび」(ボランティア事業)	乳幼児とその保護者	乳幼児が遊びの中で気軽に植物と触れる機会をもつ。	ベランダのプランターで野菜や花を種や苗から育て、季節の植物を使った遊び・制作・収穫などの体験をする。
	遠足	小学1年生～ 小学3年生	四季折々の季節感を感じたり、動植物にふれあうことにより生命の尊さなどを学ぶ。	区内又は近郊の自然豊かな施設を訪れる中で、自然の大切さ、集団行動の規律、電車などの乗り方やマナーを学ぶ。
	【H.27 新規】 はっぴい公園お花植え替え大作戦	小学1年生～ 小学3年生	地元の公園の花壇を町会が手入れしていることを子ども達に伝え植物を大事にする心を育てる。	熊野前はっぴい公園へ行き、花壇の植え替えの手伝いをする。
保育課	いもほり遠足	幼稚園児・保育園児	収穫の喜びや自然の大切さを実感できる機会を提供。	畑でのいもほり体験
	自然を活かした工作物等の製作	幼稚園児・保育園児	自然の大切さを実感し、芸術的感性を磨く機会を提供する。	木の実を使った工作物や落ち葉を使った絵画等の製作
道路公園課	ホタル観賞の夕べ (補助事業)	幼稚園児・保育園児以上	ホタルが育つ環境整備や飼育活動を通じ、こころ豊かな街づくりと子ども達の環境・情操教育の推進を図る。	荒川自然公園内のピオトープに飛交うホタル及び特設ドームに放たれた約2千匹のホタルを観賞する。
	秋を体験 荒川自然公園	乳幼児以上	子ども達に秋の自然を感じてもらうとともに、花や緑に対する感謝の気持ちを育てる。	荒川自然公園において落葉やどんぐりを使った工作、球根の植付け、秋の歌を歌うミニコンサート等を楽しむ。
	街なか花壇づくり事業	幼稚園児・保育園児以上	区民が主体となっていく街なか花壇づくりを区が支援し、街の環境美化と地域コミュニティの形成を図る。	道路や公園などの公共的な場所に設置した花壇において、草花の植付け、水やり、除草等を行う。
	昆虫観察園	幼稚園児・保育園児～小学6年生	子ども達が自然に触れ合う場を提供する。	荒川自然公園昆虫観察園に放したカブトムシを間近で観察してもらう。
	オオムラサキ観察会	幼稚園児・保育園児以上	自然や環境の大切さを感じてもらおう。	荒川自然公園オオムラサキ観察園で飼育している国蝶オオムラサキを観察してもらう。
学務課	下田臨海学園	小学4年生	自然豊かな海辺で規則正しく生活しながら動植物等の観察・学習や水泳を行い、学力と豊かな心を養うとともに体力向上を図る。	学校の夏季休業中、2泊3日で下田臨海学園に宿泊し、外浦海岸海水浴場で水泳を行うほか、海辺での自然観察、磯遊び、レクリエーション等を行う。

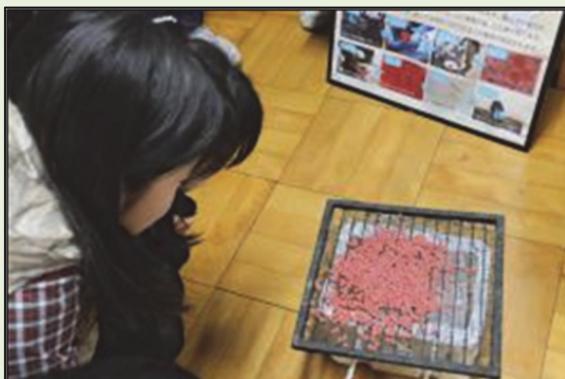
①所管課	②事業名	③対象者	④事業の目的	⑤事業概要
学務課	清里高原学園	小学4年生	豊かな自然の中での生活を経験することにより、自然や動植物を愛する心を養うとともに、現地の地理や歴史に親しんで、理科及び社会科の学習の向上を図る。また、団体行動やレクリエーションを通して、相互の友情を深め、他人を尊重する精神を培うとともに、社会生活における規律を学びとる。	学校の夏季休業中、2泊3日で清里高原学園に宿泊し、野外活動・集団体験活動を行う。清里周辺には、自然や動物、昆虫をテーマにした施設があり、こうした施設を見学するほか、レタスや桃の収穫体験等を行っている。また、ハイキングや川遊び、キャンプファイヤーのほか、種々のレクリエーション活動を行っている。
指導室	移動教室	小学5年生～ 中学2年生	教育課程の一環として移動教室を実施することにより、児童・生徒の自然に親しむ心を培い、自然と文化についての理解を深め、豊かな情感を養う。また、集団行動、集団生活を体験させることによって、連帯感や責任感及び自主的生活態度を育成する。	小学5年生、中学1年生では清里高原少年自然の家に宿泊し、農業体験や登山、周辺施設見学等を行う。また、小学6年生、中学2年生では下田臨海学園に宿泊し、ハイキングや磯生物の観察、周辺施設見学を行う。清里、下田ともに2泊3日。

### 学校パワーアップ事業

これらの事業のほかに、荒川区の区立幼稚園、区立小学校、区立中学校では「学校パワーアップ事業」として、各校がそれぞれ独自に特色ある教育活動を行っており、その一環として、自然体験や環境教育を目的とした様々な取り組みが行われています。

花壇づくりや緑のカーテンだけでなく、伝統野菜の栽培や屋上緑化、ビオトープの設置・維持管理、ユネスコの提唱するESD教育（Education for Sustainable Development「持続可能な開発のための教育」）の推進など、子ども達が自然を学び、ふれあうための様々な機会を提供しています。

中でも特徴的なのは第二日暮里小学校と尾久宮前小学校で行われている「鮭の里親事業」の取り組みです。荒川区の友好交流都市、山形県鮭川村の鮭川小学校から鮭の卵を受け取った子ども達は、卵がふ化して稚魚が放流できるようになるまでのあいだ、里親として鮭を飼育します。飼育された鮭の稚魚は、2月下旬に鮭川村に里帰りをし、3月下旬に鮭川小学校の児童と荒川区の代表児童の手によって鮭川村を流れる鮭川へと放流されます。ふ化から放流まで、「生きた教材」として鮭の成長を観察しながら、自然と環境について学ぶこの取り組みは、平成24年度から始められました。



鮭の卵を観察する第二日暮里小学校の児童



鮭の一生について説明する鮭川小学校の児童

### (3) 平成 27 年度自然体験関連事業の体系整理

前項で示した、荒川区が実施している平成 27 年度の自然体験関連事業について、ここでは①事業の対象者の年代、②事業の目的、③自然の 3 類型の 3 つの観点から体系整理を行う。

まず、各事業の対象者の年代については、事業を所管する各課の回答に基づき分類を行った。

また、事業の目的については、文部科学省（2011）と荒川区（2015a）を参考に「知的・社会的スキルの涵養」、「豊かな心を育む」、「体力アップ」の 3 つのカテゴリーを設けて分類を行った。分類に際しては、所管課による各事業の目的に関する回答と事業概要を参考に、3 つのカテゴリーの内、必ずいずれか一つのみで分類されるようにしている。当然、各事業のねらいは単一の目的のみに還元されるものではないが、これは最も特徴的な目的から分類を行うことで、より明瞭かつ図式的な理解を得ることを目的としたものである。

最後に、自然の 3 類型については、表 2（3 頁）に示した「都市の中の自然」「農山漁村の自然」「大自然」という区分を基に分類を行っている。

なお、高齢者のみを対象とした事業は今回の分類の対象とはしなかった。分類の結果はそれぞれ表 10（29 頁）、表 11（30 頁）、表 12（31 頁）のとおりである。

#### ハヴィガーストの発達課題

米国の教育学者 R. J. ハヴィガーストは人の一生を乳幼児期、児童期、青年期、壮年期、中年期、老年期の時期に分け、健全な発達のためには、各時期において達成されるべき「発達課題」が存在すると説いた。人生のそれぞれの時期における発達課題は次のとおりである。

##### ①乳幼児期

歩行／固形食物の摂取／話すこと／排泄習慣の自立／性の相違と慎みの学習／睡眠や食事の生理的リズム／人との情緒的な結びつき／正・不正の区別

##### ②児童期

身体的遊戯に必要な身体技能／自己に対する健全な態度／同年輩と仲良くする／性役割の学習／読み・書き・計算の基礎能力／日常生活に必要な概念の発達／良心・道徳性・価値判断の発達／人格の独立性／社会的集団に対する民主的な態度

##### ③青年期

同年代の異性との成熟した関係／身体構造と性役割の理解／親からの情緒的独立／経済的独立への自信／職業の選択と準備／結婚と家庭生活の準備／市民として必要な知的技能と概念／社会的に責任のある行動の遂行／行動の指針となる価値や倫理体系

##### ④壮年期

配偶者の選択／結婚相手との生活／子どもとの家庭生活／子どもの養育／家庭の管理／就職／市民的責任の負担／適切な社会的ネットワークの形成

##### ⑤中年期

大人としての市民的責任の達成／一定の経済的生活の確立と維持／青年が信頼でき幸福な大人になれるように援助／余暇活動の充実／自分とその配偶者を一人の人間として結びつけること／中年期の生理的变化の理解と適応／老年の親への適応

##### ⑥老年期

肉体的な強さや健康の衰退への適応／引退と収入の減少への適応／配偶者の死への適応／同年輩の仲間との親密な関係の確立／社会的役割の受容

参考：大藪ほか 2014：4-5

表 10 体系整理①事業の対象者の年代による分類

	乳幼児	幼保	小一	小二	小三	小四	小五	小六	中一	中二	中三	高校	一般
大人のおでかけ													
清里区民ハイキングツアー													
青少年委員宿泊研修													
中高生リーダー養成講座													
移動教室													
区民スキー教室													
自然まるかじり体験塾													
高学年キャンプ													
下田臨海学園													
清里高原学園													
わくわくふれあいキャンプ													
チャレンジ共和国													
少年キャンプ													
山登り													
わくわくチャレンジキャンプ													
国際交流バスハイク													
区民ハイキング													
冬の星空観察													
あらかわエコセンター見学													
夜の親子観察会「セミの羽化」													
浜っこガーデナーウィッシュ													
浜っこスポーツウィッシュ													
デイキャンプ(石浜)													
不思議クラブ DX													
野菜の栽培													
サマーソルティ													
マラソン大会													
冬の遠足													
オータムキャンプ													
尾久の原公園であそぼう													
デイキャンプ(南千住)													
低学年キャンプ													
遠足													
はっぴい公園お花植え替え大作戦													
自然体験ボランティア													
飛鳥山公園デイキャンプ													
エコセンター見学デイキャンプ													
子ども会大会													
エコセンターのヤゴを捕まえよう													
昆虫を捕まえて観察しよう													
葛西臨海公園に行こう													
ホテル観賞のタベ													
街なか花壇づくり事業													
オオムラサキ観察会													
昆虫観察園													
MJキッズ遠足													
いもほり遠足													
自然を活かした工作物等の製作													
交流都市交流事業													
秋を体験荒川自然公園													
クラフトタイム 落ち葉でスタンプ													
乳幼児タイム 公園遊び(2歳児)													
乳幼児タイム 屋上遊び													
乳幼児タイムにおける散歩や遠足(荒川山吹)													
幼児タイム遠足													
乳幼児タイムにおける散歩や遠足(西尾久)													
パパとあそぼう													
乳幼児タイム 野菜の栽培と収穫													
乳幼児タイムにおける散歩や遠足(東日暮里)													
乳幼児タイムにおける散歩や遠足(西日暮里)													
公園巡回サポート事業													
大竹さんと花あそび													

※一部の表記を簡略化している。

表 11 体系整理②事業の目的による分類

	乳幼児	幼保	小一	小二	小三	小四	小五	小六	中一	中二	中三	高校	一般
豊かな心	国際交流バスハイク												
	浜っこガーデナーウィッシュ												
	デイキャンプ(石浜)												
	野菜の栽培												
	サマーソルティ												
	冬の遠足												
	オータムキャンプ												
	遠足												
	はっぴい公園お花植え替え大作戦												
	自然体験ボランティア												
	飛鳥山公園デイキャンプ												
	エコセンター見学デイキャンプ												
	ホテル観賞のタベ												
	街なか花壇づくり事業												
	オオムラサキ観察会												
	昆虫観察園												
	MJキッズ遠足												
	いもほり遠足												
	自然を活かした工作物等の製作												
	交流都市交流事業												
	秋を体験荒川自然公園												
	クラフトタイム 落ち葉でスタンプ												
	乳幼児タイム 公園遊び(2歳児)												
	乳幼児タイム 屋上遊び												
パパとあそぼう													
乳幼児タイム 野菜の栽培と収穫													
公園巡回サポート事業													
大竹さんと花あそび													
体力アップ	大人のおでかけ												
	清里区民ハイキングツアー												
	区民スキー教室												
	高学年キャンプ												
	下田臨海学園												
	清里高原学園												
	山登り												
	マラソン大会												
	区民ハイキング												
	浜っこスポーツウィッシュ												
	低学年キャンプ												
	乳幼児タイムにおける散歩や遠足(荒川山吹)												
	幼児タイム遠足												
	乳幼児タイムにおける散歩や遠足(西尾久)												
	乳幼児タイムにおける散歩や遠足(東日暮里)												
	乳幼児タイムにおける散歩や遠足(西日暮里)												
知的・社会的スキルの涵養	青少年委員宿泊研修												
	中高生リーダー養成講座												
	移動教室												
	自然まるかじり体験塾												
	わくわくふれあいキャンプ												
	チャレンジ共和国												
	少年キャンプ												
	わくわくチャレンジキャンプ												
	冬の星空観察												
	あらかわエコセンター見学												
	夜の親子観察会「セミの羽化」												
	不思議クラブ DX												
	尾久の原公園であそぼう												
	デイキャンプ(南千住)												
	子ども会大会												
	エコセンターのヤゴを捕まえよう												
	昆虫を捕まえて観察しよう												
	葛西臨海公園に行こう												

※一部の表記を簡略化している。

表 12 体系整理③自然の3類型による分類

		乳幼児	幼保	小一	小二	小三	小四	小五	小六	中一	中二	中三	高校	一般
都市の中の自然	豊かな心	浜っこガーデナーウィッシュ												
		デイキャンプ(石浜)												
		野菜の栽培												
		サマーソルティ												
		冬の遠足												
		オータムキャンプ												
		遠足												
		はっぴい公園お花植え替え大作戦												
		自然体験ボランティア												
		飛鳥山公園デイキャンプ												
		エコセンター見学デイキャンプ												
		ホテル観賞のタベ												
		街なか花壇づくり事業												
		オオムラサキ観察会												
		昆虫観察園												
		MJキッズ遠足												
		自然を活かした工作物等の製作												
	秋を体験荒川自然公園													
	クラフトタイム 落ち葉でスタンプ													
	乳幼児タイム 公園遊び(2歳児)													
	乳幼児タイム 屋上遊び													
	パパとあそぼう													
	乳幼児タイム 野菜の栽培と収穫													
	公園巡回サポート事業													
	大竹さんと花あそび													
	体力アップ	浜っこスポーツウィッシュ												
		マラソン大会												
		乳幼児タイムにおける散歩や遠足(荒川山吹)												
		幼児タイム遠足												
		乳幼児タイムにおける散歩や遠足(西尾久)												
		乳幼児タイムにおける散歩や遠足(東日暮里)												
	乳幼児タイムにおける散歩や遠足(西日暮里)													
	知的・社会的スキルの涵養	中高生リーダー養成講座												
チャレンジ共和国														
冬の星空観察														
あらかわエコセンター見学														
夜の親子観察会「セミの羽化」														
不思議クラブ DX														
尾久の原公園であそぼう														
デイキャンプ(南千住)														
子ども会大会														
エコセンターのヤゴを捕まえよう														
昆虫を捕まえて観察しよう														
葛西臨海公園に行こう														
漁農山	心	いもほり遠足												
		交流都市交流事業												
	知	自然まるかじり体験塾												
大自然	心	国際交流バスハイク												
		大人のおでかけ												
	体力アップ	清里区民ハイキングツアー												
		区民スキー教室												
		高学年キャンプ												
		下田臨海学園												
		清里高原学園												
		山登り												
		区民ハイキング												
	低学年キャンプ													
	スキルの社会的涵養	青少年委員宿泊研修												
		移動教室												
		わくわくふれあいキャンプ												
少年キャンプ														
わくわくチャレンジキャンプ														

※一部の表記を簡略化している。

### ① 年代別の分類（表 10）から分かること：切れ目のない事業展開

年代別の分類（表 10）を見ると、荒川区では乳幼児から大人に至るまで、幅広い年代を対象に、途切れることなく自然体験に関連する事業を展開していることが分かる。

最も多くの事業が提供されているのは小学校 1 年生から 6 年生であり、幼稚園児・保育園児を対象とするものがそれに続く。また特にふれあい館を中心として、乳幼児を対象とした事業が設けられていることは、荒川区の自然体験事業の特色の一つであると言える。中学生以降、自分達で自発的に自然体験を行うことができる年代になると、その年代を対象とした自然体験事業の数は減少する。

### ② 目的別の分類（表 11）から分かること：発達段階に応じた自然体験

また、活動の主たる目的別の分類（表 11）からは、大まかな傾向ではあるが、活動目的ごとに対象年代が異なることが分かる。

自然への感受性など豊かな心を養うための事業は主に乳幼児や小学校低学年の児童を対象に行われており、体力の向上を目的とした事業は小学生全般を中心として、次世代を担う人材育成（知的・社会的スキルの涵養）を目的とした事業は小学校高学年から中高生を中心に行われている。

子どもの発達段階に応じて、多様な活動プログラムが用意されていることが分かる。

### ③ 自然の 3 類型による分類（表 12）から分かること：新たな体験の在り方に向けて

さらに自然の 3 類型の分類（表 12）からは、荒川区の自然体験関連事業の特徴として以下の諸点を指摘することができるだろう。

第一に、公園やふれあい館の敷地等を活用し、都市の中の自然を活かした活動が数多く実施されているという点である。

自然が少ないと言われる都市の中にも、多くの自然が隠れている。荒川区動植物データベースによれば、2015 年 4 月 6 日現在、荒川区では 516 種の植物、100 種の鳥類、447 種の昆虫類が確認されている（荒川区 2015b）。ベランダの緑や、公園に住む鳥や昆虫など、都市の中の自然には意識していなければ見逃してしまうものも多い。都市の中での自然体験は、豊かな心や知的・社会的スキルの涵養、体力アップ等のそれぞれの個々の目的に加え、実際に都市の中の自然に親しむことで、普段、意識から隠れている都市の中の自然の豊かさに気づく機会を提供するという点でも重要である。

第二は、主に体力アップと知的・社会的スキルの涵養を目的として、大自然の中での自然体験が行われている点である。大自然の中での自然体験は概ね小学校中学年以降を主たる対象としており、都市の中での自然体験と併せて見ると、全体として、小学校低学年までは主に都市の中で自然と親しむことを中心に豊かな心の養成が、小学校中学年、高学年以降はそれらに体力アップや知的・社会的スキルの涵養という目的が付け加えられ、子どもの成長に則して重層的に各種のプログラムが配置されていることが分かる。

第三に目を引く点として、自然観察やキャンプ、公園での散策等の活動の機会が数多く提供される一方で、農業体験、林業体験、漁業体験等の機会は必ずしも多くないことが挙げられる。

都市の生活は、農山漁村で行われる様々な生産活動と無関係であるのではなく、むしろそれらに大きく依存している。農山漁村からもたらされる各種の自然の産物を通じ、都市というコミュニティは自然

の中に立脚しているものであり（2頁、図2参照）、農業や林業、漁業等、農山漁村で行われる人間の生計の営みは、我々と自然、都市と自然をつなぐ接点であると言える。

人間がこれまで自然とどのような関係を学んできたのか。また、自然との友好的な関係を維持しながら、今後どのように持続的な発展を成し遂げていくのか。

「持続可能な開発のための教育」（Education for Sustainable Development: ESD）の一環として、あるいは人と自然とのつながりを自覚するための一つの契機として、ここ20年ほどの間に<sup>10</sup>、農山漁村での生活体験が注目されるようになってきた。

現在、環境省では「森里川海を豊かに保ち、その恵みを引き出すとともに「一人一人が、森里川海の恵みを支える社会」をつくるため、「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを実施している（環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム2015:7）。

また、グリーンツーリズム（エコツーリズムとも）の浸透に伴い、今日では自治体と民間が連携しながら農業体験等の各種体験活動の機会を提供する試みも行われている（片岡2008; 石田2010; 富吉・北野2014）。特にこのような試みに対しては、総務省、文部科学省、農林水産省による連携施策「子ども農山漁村交流プロジェクト」による支援が行われており、農山漁村での生活体験や現地の交流を実施したいと考える各種団体と受け入れ先とを繋ぐオンラインシステム「子ども農山漁村交流プロジェクトコーディネートシステム」（<http://www.kouryu.or.jp/kodomo/>）が公開されているところである。

グリーンツーリズムを推進する地方自治体や民間団体では、受け入れの設備や人員、指導プログラムが既に一定の水準で整えられているのが特徴である。こうした団体と連携をしながら、農山漁村での自然体験を充実させていくことが、荒川区の新たな課題になると思われる。

## 子ども農山漁村交流プロジェクト

総務省、文部科学省、農林水産省の3省による連携施策「子ども農山漁村交流プロジェクト（愛称「ふるさと子ども夢学校」）」では、農山漁村交流を希望する各種学校や企業、団体と、各地の受入地域協議会をつなぐ「子ども農山漁村交流プロジェクトコーディネートシステム」を運用しています。

（<http://www.kouryu.or.jp/kodomo/>）

受入地域協議会では、農林漁家での宿泊や生活体験の手配のほか、各種の体験活動に必要な施設や指導者の手配を行っています。

<sup>10</sup> たとえば国立情報学研究所が運営する学術情報データベース CiNii で検索すると、1990-1999年の間に出版された論文の内、林業体験や漁業体験をタイトルに含む論文はそれぞれ7件と6件に過ぎなかったが、2000年から2009年の間には24件と28件というように3-5倍程度増加している。また、農業体験をタイトルに含む論文は、1990-1999年には18件であったが、2000-2009年には182件とおよそ10倍にまで増加した。

#### ④ 連携・協力の重要性

これらの点に加え、次の点についても指摘しておく必要があるだろう。

表 9 から分かるとおり、荒川区で行われている自然体験関連事業の多くが、区単独ではなく、他の様々な団体との連携によって実施されている。

補助事業はもちろん、荒川区が主体となって実施している事業においても、青少年育成地区委員会連絡協議会や学校、幼稚園、あるいは、ふれあい館の指定管理者等の民間企業、NPO や各種任意団体等との連携・協力が行われており、区外で行われる活動では、他自治体の協力を仰ぐこともある。

自然体験事業にはそれを行う上で多数の主体（アクター）が関わっているのであり、その意味で自然体験事業の充実と活性化は、決して荒川区単独の力で成し遂げられるものではない。

様々な主体とどのように連携・協力するか、その関係の在り方が問われていると言えよう。

#### ⑤ 啓発と支援

また、自然を体験する主体としての子どもはもちろん、子どもに自然体験の機会を提供する主体としての保護者の役割も忘れてはならない。

子どもが学校教育の場でどのような自然体験の機会を得られるかは、保護者が自然体験に関心を抱いているか否かにある程度依存する。たとえばもし保護者がキャンプを好まないのであれば、その子どもは、キャンプ好きの保護者の子どもに比べ、キャンプを行う機会は少なくなることだろう。もちろん、キャンプ以外にも様々な自然体験があり、たとえキャンプに行く機会が無くとも、それら他の活動を通して、自然とふれあう機会を得ることができる。しかし、保護者が自然そのものに関心を持たない場合、自然体験の機会そのものが減少せざるを得ないだろう。

このような観点からは、子どもの自然体験の機会を増やしていくためには、様々な活動を提供することはもちろん、子どもとともに保護者にも自然へと関心を抱いてもらうための啓発活動が重要である。

今回のアンケート調査では、「自然への関心」が低い児童のケース（14 頁以下参照）の場合でも、自然体験を経験した後は自然への関心が向上することが明らかとなった。この結果は、恐らく児童に限らず成人にもあてはまるものであろう。現在、荒川区では「夜の親子観察会」など保護者と子どもの双方を対象とした事業を多数展開しているが、自然体験を通じた子どもの健全育成をより効果的に進めていくためには、こうした事業を通じ、子どもだけでなく、保護者にも自然への関心を高めてもらう工夫をしていくことが有効であると思われる。

また、このように保護者が自然体験に関心を有していない場合以外にも、子どもの自然体験の機会が制限されるケースとして、保護者は子どもに豊富な自然体験をさせたいと考えているが経済的事由等によりそれが困難である場合が挙げられる。我が国における子どもの貧困率は 2012 年時点で 16.3% となっており（厚生労働省 2014）、OECD 加盟 34 か国の平均である 13.3% を上回る（OECD 2014）<sup>11</sup>。貧困状態にある子どもに対する包括的なアプローチについては既に荒川区自治総合研究所（2011b）で論じたところであるが、こうした経済的問題についても念頭におく必要がある。

さらに、特別な医学的ケアを必要とする等の理由で、郊外での自然体験活動を行うことが難しい子どもに対しては、都市の中の自然を充実させていくことで、体験の支援をしていくことが必要であろう。

様々な状況を踏まえながら、全体として、子どもの自然へのアクセス権を担保していく仕組みづくりが求められる。

<sup>11</sup> その算出方法に起因する相対的貧困率のいくつかの課題点については阿部（2012: 365-366）を参照。

## 2 事例調査

以上、既存事業の体系整理からはいくつかの課題が浮かび上がった。

一方、個々の事業に携わっている人々は活動を実施していく上で特にどのような課題を感じているのだろうか。マクロな視点からだけでなく、ミクロな視点からも、子どもの自然体験を巡る現状と課題を明らかにするため、特に多くの児童が参加する自然体験関連事業として「自然まるかじり体験塾」と「少年キャンプ」の2つの事例について、インタビュー調査を実施した。

### (1) 事例①「自然まるかじり体験塾」

「自然まるかじり体験塾」とは、小学4年生から中学3年生の児童・生徒を対象に、千葉県鴨川市内の農家にホームステイをしながら、農業体験と漁業体験を行う自然体験活動であり、昭和62年から事業を実施している。

実施主体は荒川区青少年育成地区委員会連絡協議会<sup>12</sup>である。

表 13 「自然まるかじり体験塾」参加者数等推移

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
参加者数	40 名	39 名	39 名	40 名
実施場所	千葉県鴨川市 (受け入れ農家 12 軒)	千葉県鴨川市 (受け入れ農家 12 軒)	千葉県鴨川市 (受け入れ農家 10 軒)	千葉県鴨川市 (受け入れ農家 11 軒)

「自然まるかじり体験塾」に係る荒川区青少年育成地区委員 1 名に対し、インタビューを実施した。なお当該インタビューに際しては荒川区児童青少年課の職員 2 名が同席し、活動内容等について補足的な説明を行っている。インタビュー内容は次の 36 頁のとおりである。

### (2) 事例②「少年キャンプ (チャレンジキャンプ)」

「少年キャンプ (チャレンジキャンプ)」とは、区主催の「チャレンジ共和国」に参加した小学3年生から中学3年生の児童・生徒を対象に、「チャレンジ共和国」で学んだ野外炊飯の技能等を実地で体験する他、ハイキング等を通じ生きる力の涵養を目的とする自然体験活動であり、平成12年から区の補助事業となった。

実施主体は荒川区少年団体指導者連絡会であり、荒川区青少年委員<sup>13</sup>が協力して運営を行っている。

表 14 「少年キャンプ」参加者数等推移

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
参加者数	88 名	83 名	78 名	92 名
実施場所	朝霧野外活動センター	浜石野外センター	伊豆大島	那須甲子青少年自然の家

「少年キャンプ」に係る荒川区青少年委員 1 名に対し、インタビューを実施した。インタビュー内容は 37 頁のとおりである。

<sup>12</sup> 荒川区青少年育成地区委員は、町会や区内の小中高等学校、PTA、保護司会、民生委員、児童委員、青少年委員、警察署等の団体から選ばれ、地域ごとに南千住地区委員会、荒川地区委員会、町屋地区委員会、尾久地区委員会、日暮里地区委員会の 5 つの青少年育成地区委員会がある。青少年育成地区委員会連絡協議会は各地区委員会から 5 名ずつ選出された委員で構成され、各地区委員会の連絡調整等を行うほか、各地区委員会の合同事業を行う。

<sup>13</sup> 青少年委員は青少年教育の振興を目的に教育委員会から委嘱された区の非常勤職員であり、荒川区青少年委員連絡会は青少年委員によって結成された任意団体である。

## 「自然まるかじり体験塾」に関するインタビュー要旨

質問者：事業の目的・ねらいは何か。

青少年育成地区委員：体験塾の目標としては、①「農作業等を通して、働くことの大切さを知る」、②「食物の大切さを知り、生産者に対する感謝の心を育てる」、③「農村と都会の生活習慣の違いを理解する」、④「自然のすばらしさ・大切さを知り、自然を愛し、保護する心を育てる」、⑤「思いやりの心や他人に迷惑をかけないことを心がける」の5点があげられる。

質問者：具体的な活動内容について。

荒川区職員：毎年、友好都市である鴨川市に2泊3日でお伺いして農家の方のご自宅にホームステイさせて頂き、農業体験、漁業体験を行っている。2日目の夜までは農業体験、3日目には鴨川漁港での漁業体験を行う。漁業体験は皆で同じ活動を行うが、農業体験の内容は各受け入れ農家によって異なる。

質問者：この活動の特徴的な点はどこにあるか。

青少年育成地区委員：学校も学年も、住んでいる地域も違う子どもが参加すること。ホームステイは数人で一つのグループに分かれて行うが、年長の子がグループリーダーになってグループをまとめることになる。個人差はあるがリーダーは皆、自覚をもって2泊3日の生活をまとめてくれている。

質問者：子ども達の反応はどうか。

青少年育成地区委員：東京では動物にも触れない、虫も嫌いってような子ども達が、そうした環境の中で暮らすわけだが、皆、本当に生き生きしている。

荒川区職員：私も3回担当させて頂いているが、出発する時と帰って来た時の姿を見ると、やっぱり一回り成長しているなど感じる。引っ込み思案な子も帰って来たら積極的になっていたり、自己肯定感がすごい向上していると感じる。

質問者：保護者の方の反応はどうか。

青少年育成地区委員：保護者の方も子どもの成長を感じて頂いているようで、受け入れ先の農家の方が保護者の方から御礼の手紙が来たと言っていた。とくに苦情は聞いたことがない。

荒川区職員：苦情はないが、ご家庭によってはアレルギーがあるので気をつけて欲しいとか、余り服を汚さないようにして欲しいといった声をいただくこともある。

質問者：受け入れ先の反応はどうか。

青少年育成地区委員：29年間受け入れを続けて下さっている方や、子ども達が来るのを楽しみにしている方もいて、活動が根付いてきているのを感じる。ただ自然の流れとして、高齢化で受け入れ農家が減っている状況にある。今回は鴨川市から新たに受け入れ先の農家を紹介してもらった。

荒川区職員：鴨川市には、市長さんをはじめ市全体でまるかじり体験塾について、とても協力的に対応して頂いている。しかしやはり高齢化の問題があり、昨年度まで、漁業体験の一環としてイカの塩辛づくりを、漁業組合の婦人部にお願ひして実施していたが、今年は人手不足で受け入れが難しいということだった。今年は別の団体にお願ひしたが、受け入れ農家を含め、今後どのように継続性を担保していくのか、若返りが必要だと考えている。

質問者：高齢化の他に特に課題と考えている点はあるか。

荒川区職員：クチコミで人気が広がり、ここ数年は参加希望人数が受け入れ可能人数を越えているため抽選をしている状況にある。今年は応募者が73名、そこから初参加の人を優先し、それでも人数が多いので、抽選を行って40名に参加者を絞っている。できるだけ受け入れ人数を拡大していきたいという思いはあるが、そのためには受け入れ農家を増やさなくてはならない。高齢化もあり難しい課題であるが、今後も鴨川市と連携を強化して、対応していきたい。

青少年育成地区委員：自然まるかじり体験塾がこれから先も続いてくれることを一番に願っている。そのため、やはり高齢化が最大の課題で、こちらから受け入れ先の農家を探していくことも必要かもしれない。

## 「少年キャンプ」に関するインタビュー要旨

質問者：事業の目的・ねらいは何か。

青少年委員：自然の中で仲間とともに活動することで、仲間の大切さを知ること。また、社会で生きていくために必要な技能を身につけることを目的としている。

質問者：具体的な活動内容について。

青少年委員：火をおこしたり包丁を使ったり、キャンプ生活を通じて基本的な生活スキルを身につけることができるように工夫している。また「追跡ハイキング」といって、自然に関する問題を出題して、それを解きながらハイキングをする、楽しみながら自然について学ぶということもやっている。今年は国立那須甲子青少年自然の家で2泊3日の日程で実施した。

質問者：この活動の特徴的な点はどこにあるか。

青少年委員：同じ学校の子は一緒のグループにしないようにしている。

質問者：子ども達の反応はどうか。

青少年委員：子ども達が成長しているのを実感する。特に目立つことは自然の話や色々の話を聞いて帰ってくるとゴミのポイ捨てをしなくなること。子どもによっては落ちているゴミを自分から進んで拾うようになる子もいる。

質問者：保護者の方の反応はどうか。

青少年委員：参加した子どもの保護者からは、子どもがたくましくなったと褒められることが多い。ただ現状では参加希望者の数が多すぎて参加者を抽選で決定しており、2年連続で抽選から漏れてしまった子どもの保護者からはお叱りを受けることもある。

質問者：引率する青少年委員自身の反応はどうか。

青少年委員：活動を通して我々も成長していると感じる。自分達もスキルアップする必要があると思う。経験の浅い者とベテランを組み合わせるようにしている。

質問者：特に課題と考えている点はあるか。

青少年委員：引率する青少年委員の体制や予算、そして安全面を考えると、どうしても受け入れられる子どもの人数に限りが出てくる。80人が一つの目安で、これまでは、ちょうど80人ぐらいだったので問題は無かったが、年々人気が出てきて、今年は120人の応募があった。何とか100人までは受け入れることとしたが、100人規模の子どもを引率する場合は、青少年委員の人数を増やす必要がある。今後、子どもの人数に合わせた支援体制を確保していくことが課題ではないか。

### (3) 事例の考察と課題

以上の2つのインタビューから何を言うことができるだろうか。

まず、いずれのケースでも、担当者が自然体験の前後での子どもの成長を実感している点について確認しておく必要があるだろう。特に「自然まるかじり体験塾」に関するインタビューでは積極性や自己肯定感の向上が、「少年キャンプ」に関するインタビューでは道徳性の向上が、特筆すべき点として語られた。この実感は、積極性や現実肯定、徳育的能力に有意な向上が認められたアンケート結果（第Ⅱ章参照）と一致する。また、保護者からも子どもの成長を感じるという評価が得られており、自然体験が子どもの健全育成に資するということが多角的に裏付けられたと言える。

一方、「自然まるかじり体験塾」と「少年キャンプ」では、ともに受け入れ可能人数（キャパシティ）を越える参加希望者が集まっている。現状では両事業とも最終的には抽選で参加者を決定している状況にあり、参加希望者と受け入れ可能人数の間には、20から30名の需給ギャップが存在することが明らかになった。より多くの子ども達に自然体験の機会を提供していくためには、この需給ギャップをできる限り解消していくことが重要である。

一つの事業の中で受け入れ可能人数を増やすことは、安全性の確保などの点からも限界があるように思われる。そのため、たとえば、同種の事業を複数展開することで、全体としての受け入れ人数を拡大していくことが有効であろう。また、活動への参加を希望する子ども達の観点から見た場合、一つの事業の受け入れ可能人数の拡大以外にも、有効な解決策があることが分かる。それは同じように魅力のある、質の高い体験活動に参加する機会を提供することである。新たな自然体験事業を設けることはもちろん、参加者から高い評価を受けながらも十分に知られていない事業や、まだ参加者に余裕のある事業を紹介できるような仕組みづくりも一つの効果的な解決策であると言える。

また、「自然まるかじり体験塾」の場合で言うと、受け入れ先の高齢化という固有の問題があった。

高齢化に伴い受け入れを辞退する農家に代わって、新たに受け入れ農家となる人を見つけるのは困難な作業である。受け入れ農家には、子ども達を預かるという責任に対する心理的な負担が存在するが、新たに受け入れ農家になろうという人の場合、経験やノウハウの不足からこの負担が既存の受け入れ農家よりも大きくなることが想定され、そのような負担感が心理的な障壁となることが予測される。

受け入れ先との地道な調整を続ける一方、既存の受け入れ農家が培ってきたノウハウを言語化・可視化することで、新規に参入する、あるいは参入しようとする農家の心理的な負担感や不安感を軽減させる仕組みづくりが重要である。その際、大分県宇佐市安心院地区の例など、民泊を活用したグリーンツーリズムの先進事例を参考にしていくことは有益であると思われる（cf. 若林 2013）。

いずれの場合であれ、必要とされるのは中長期的な観点から、受け入れ人数を拡大し得る十分な基礎を築くことである。短期的な成果を求めて無理にキャパシティを拡大した結果、活動の質の低下を招くことは最も避けなければならない事態である。自然体験活動の質を維持しつつ事業を拡大していくためには、ノウハウの継承など個々人のスキルアップはもちろん、実施主体となる団体に対する区の支援の在り方など総合的な取り組みが不可欠である。

これら2つの事例における課題が、荒川区の自然体験関連事業に共通のものであるのか否かについては、個々の事業についての更なる調査研究が必要であるだろう。しかし今回明らかとなった問題は、自然体験を通じた子どもの健全育成を推進していく上で、考慮に値する重要な課題であると言える。

## IV 子ども達の自然体験をさらに推進させていくために

(海老原麻美、山田庄太郎)

前章における体系整理とインタビュー調査からは、荒川区の自然体験関連事業の特徴や強みとともに、次の2つの点が明らかになった。すなわち、①農林漁業体験等の生活体験を含む、農山漁村での自然体験を拡大していく余地があるということ、②参加希望者数と受け入れ可能人数の間にかかなりの開きがある事業が存在すること、の2点である。

自然体験を通じた子どもの健全育成を推進していくためには、これらの点にどのように効果的に対応していくか、またそれに加えてどのように従来の事業を充実化させていくかが課題となる。

前章の最後に示したように、個々の事業にはそれぞれ固有の事情があり、全ての課題を一時に解決する魔法のようなものは存在しない。しかし一つ一つの課題に答え、対策を立てていくための基本的なアプローチを提示することは可能である。これらの基本的なアプローチをもとに、個々の課題に取り組んでいくことで、自然体験の機会の充実と発展を図ることができるだろう。

### 1 基本的アプローチ

#### (1) 連携の強化

##### ① 地域団体、民間団体との連携

先に述べたように、区では様々な自然体験事業が行われている一方で、農山漁村での宿泊を伴うものなど、事業によってはその人気故に、参加希望数に受け入れ可能数が追いついていない現状がある。子ども達に平等な自然体験の機会を提供していくためには、この需給ギャップをできる限り解消していくことが求められる。

この点において、重要な主体（アクター）となるのが、様々な独自の自然体験メニューを提供している地域団体やNPO法人等の民間団体である。これらの団体は、自然観察会や環境保全活動などの環境教育に力点を置いた活動や、農業体験や各種工作などの自然との触れ合いを主眼としたもの、登山やハイキングなど体力向上やレクリエーションを目的としたものなど、幅広い分野に渡る活動を行っている。また、これらの団体は当該団体の活動分野に関する専門的な知見と独自の人材、ノウハウを有していることから、これらの団体との連携を強化することで、質・量の両面から子ども達の自然体験を充実させていくことが可能となる。

既に荒川区では、青少年育成に関する地域団体等、様々な団体との連携を進めているところであるが、今後もより幅広い連携の可能性を模索していくことが必要であろう。なお、地域住民らのボランティアを主としているような団体や比較的小規模の団体などにおいては、財政的負担の面から参加者の受け入れ能力に制限があったり、継続的な活動を行うために必要な次世代の人員の育成に苦勞している団体も多い（この人材育成の面については本節第2項にて詳しく取り上げる）。こうした団体に対しては、財政面に対する支援というのも有効であると考えられる。

##### ② 他自治体との連携

また近年、グリーンツーリズムなど地域の自然環境・生態環境を資源とした新しい観光の在り方に注目が集まっている。既にいくつかの自治体では、エコツーリズムやグリーンツーリズムの思想を基軸と

した新たな観光戦略を打ち出している。

グリーンツーリズムの特徴は、自然と親しみながら自然環境についての理解を深め、社会の持続的発展のために必要な視座を身に着けるといふ、学びの要素が含まれる点にある。また、学びを目的とするため、多くの場合森林ガイド等の地域の人々との交流が行われるのも特徴であると言えよう。

東京では伊豆諸島や小笠原諸島、奥多摩町がグリーンツーリズムにいち早く取り組んだ先進地域として知られる。たとえば、奥多摩町は平成 23 年に一般財団法人おくたま地域振興財団<sup>14</sup>を設立し、広大な森林や数多くの渓谷などの豊かな自然環境を生かし、「奥多摩森林セラピー」として、ガイドウォークや森林ヨガといった様々な体験メニューを行っている。

このようにグリーンツーリズムに力を入れている自治体では、観光客を受け入れるための施設整備などのハード面はもちろん、独自の体験プログラムの企画や人的態勢などのソフト面にも力を入れており、これらの自治体と連携を図ることで、効率的かつ効果的な自然体験を行うことができるようになると思われる。

また、荒川区は全国連携の取り組みを積極的に進めており、交流都市のほか、「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合（通称「幸せリーグ」）」<sup>15</sup>といった独自のネットワークを持っている。区ではこれまでも山形県鮭川村との連携による「鮭の里親事業」（27 頁コラム参照）など、特色ある様々な連携の試みを行ってきたが、今後もこうした子どもの豊かな成長にとって有益となる地域間交流をさらに充実させていくことが求められる。

## (2) 人材育成

### ① 指導者の養成

自然教室やキャンプ、自然観察会、環境学習、自由工作等の子どもの自然体験の多くには、それらの体験活動を指揮・コーディネートする指導者（コーディネーター、ファシリテーター等の様々な呼称で呼ばれる）がいる。

自然体験の質は、体験活動のプログラム以外に、指導者の指導方法によっても左右される。子ども達と接する上でいかに子ども達の興味関心をかきたて、自然体験を有意義なものとしていくか。声の抑揚一つをとっても、実際の指導には容易にマニュアル化しがたい機微が含まれる。したがって、優れた指導者の養成は、自然体験事業の充実を考える上で最も重要な課題の一つである。

子どもの自然体験を推進する団体の中には、サイエンス・ファシリテーター講座や自然観察指導員養成講座など、各種自然体験活動の指導者の養成を目的とする活動を行っているものも数多い。こうした団体との連携を推進していくことは、課題に対する一つの有効なアプローチとなるだろう。

また、既に荒川区では、荒川区職員ビジネスカレッジにおいて自然観察指導員を養成する講座を開催するなど、区職員を対象とした人材育成の試みが行われており、荒川コミュニティカレッジにおいてもこうした講座に区民が参加できる機会を設けているところである。今後、自然体験活動を一層充実させていくためには、より多くの区民等が学べる場をさらに創生し、地域の団体の人材育成を支援していくことが求められる。

<sup>14</sup> 一般財団法人おくたま地域振興財団ホームページ <http://okutama-therapy.com/>

<sup>15</sup> 住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合（通称「幸せリーグ」）は、住民の幸福実感向上に向けて、基礎自治体同士が相互に連携し行政運営の一層のレベルアップを図ることを目的に、平成 25 年 6 月に荒川区を発起人代表として設立された連合体である。

## ② 技能の継承

自然体験活動の指導のノウハウは行政、民間を問わず、当該活動団体の長年の活動の結果であり、一度その伝統が途絶えると、新たにそれを確立するためには多大な時間を必要とする。そのため、子どもの自然体験について、長期的にみた場合、指導者の技能をいかに継承し、世代交代をどのように適切に図っていくかということは大きな課題であろう。

区立宮前小学校では、保護者の有志で発足した「宮前ブナの会」が中心となり、5、6年生の希望者と地域の人々が新潟県三条市でブナの植樹活動<sup>16</sup>を行っている。この活動は平成15年度から毎年行われており、近年ではかつて活動に参加した児童が今度は引率者として参加している例もでてきたという。

このように、かつて体験活動に参加した児童・生徒が、その時の体験を基に、自ら指導者になることを選択することで、その活動が持続可能な形で継続できるというのは、世代交代が円滑にできている成功事例と言える。もちろんこうした事例がすべての自然体験活動についてあてはまるわけではないが、実際に自然体験活動を行う様々な団体の成功事例を収集・分析し、その共有化を図るなど、行政としても各種団体の活動をサポートしていくことが求められる。

## (3) 新たな視点

### ① 自然体験に対する認識の拡大

第I章3節で述べているとおり、本レポートでは自然体験をその活動の中で自然に触れる機会を有する様々な活動と定義しており、その重要な要件として、自然に触れ、自然の持つ不思議さや生命の意義について思いを致すということを挙げている。

このような視点で区の様々な事業を見返してみると、自然と接する機会を持ちながらも、「自然体験」については特段意識されていないものも存在しているように思える。そうした各種の事業に対して、自然とのふれあいや環境教育といった新たな視点を導入することで、従来の事業をさらに強化していくことは非常に重要である。

たとえば、ハイキングや果物狩りなどを行う国際交流バスハイクや区民ハイキングは、余暇活動（レジャー）という意味合いが強いように感じられるが、同時に農山漁村を訪れる貴重な機会でもある。このような事業において、自然体験ということこれまで以上に意識し、農山漁村と都市の関係や山野の野草等についての事前学習をするといった体験プログラムの工夫を行っていくことが大切である。

### ② まちづくりにおける自然体験の視点

まちづくりの分野において、自然体験という視点を取り入れることは重要な意味を持つ。

先の体系整理（31頁、表12参照）からは、荒川区が提供する自然体験事業には、都市の中での自然体験が非常に多いことが分かるが、都市の中での自然は、子ども達が最初に、また最も頻繁に触れる自然であり、その意味で、自然体験の場として重要な役割を担っている。

荒川区は東京23区の中でも人口密度が高く（平成28年1月1日時点、豊島区に次ぐ2位）、緑被率は12.30%（平成19年調査時点）と低い。しかしながら、意識して区内を見渡してみると、「街なか花壇」や都電荒川線沿いのバラ、さらには玄関先のプランター、鉢植えのちょっとした緑など、街の至るところに自然があることに気づくだろう。こうした都市の中にある自然を活用し、子ども達の自然体験

<sup>16</sup> 「子どもは地域が育てる」という意識のもと、新潟三条市「栄ブナの会」の協力を得て「にいがた緑の100年物語県民運動」に参加し、「みやまえぶなの森」を百年がかりでつくることを目標にした活動である。これまで1000本以上のブナの木が児童達の手によって植樹されている。

の機会をいかに生み出していくかというのは非常に重要な視点である。

「街なか花壇」や都電荒川線沿いのバラの世話などの活動は現在、区民のボランティアグループなど、主に大人の手によって行われている。地域活動の拠点として幅広い年代が利用するふれあい館を基点に、これらの活動に子ども達を巻き込む仕組みづくりを行っていくことで、都市の中で土や木、草花に触れる機会を創出し、子ども達の自然への関心を高めていくことができるだろう。

また、平成 29 年 3 月には図書館機能、文学館機能、子ども施設機能の 3 つの機能が一体となった施設「ゆいの森あらかわ」が新たに開館する予定である。同施設では「体験を通じた学び (Learning by Doing)」の手法を取り入れ、子ども達に対して、自然体験や科学実験などの多様な体験型ワークショッププログラムを提供することが計画されており (荒川区 2011: 55, 57)、施設緑化の充実とあわせて、自然とのふれあいの拠点の一つとして活用していくことが期待される。



ゆいの森あらかわ外観イメージ



ロゴマーク

### 都立公園への保育園の整備

荒川区では、人口の増加に伴い保育需要が高まる一方で、保育園を建設するための用地の不足が課題となっています。そこで、保育園の待機児童解消に向けた新たな取り組みとして、国家戦略特区制度の規制緩和を活用し、都立汐入公園内への保育園の整備を行います。こうした取り組みは全国初の試みです。

これにより、南千住地域の保育定員拡大と保育サービスの充実が図られるとともに、自然豊かな公園の中で過ごす時間が増えることから、幼児期における情緒面の育成が期待されています。



都立汐入公園に新設される保育園のイメージ

## 2 今後の展望と検討課題

以上の議論によって、自然体験事業の充実と推進に向けた一定の方向性を示すことができたものと考えられる。しかし自然体験を通じた子どもの健全育成について、本レポートでは十分に論じることのできなかった問題や、今回の調査研究から新たに明らかとなった検討課題が存在するのも事実である。

ここでは、新たな検討課題を示すことで、本研究プロジェクトの今後の展望について素描することを試みる。

今回実施したアンケート調査では、自然体験が子どもの健全育成に肯定的な影響を与えることが示された。特に、事前調査で「自然への関心」の得点が低かった児童が、事後調査で大きくその数値を伸ばしていることは、興味深い発見であったと言える。

しかしここからはまた新たな問いが浮かび上がってくる。事前調査における IKR 各指標の、あるいはまた幸福実感度の各回答者の得点差は何に起因するのか、すなわち、家庭環境や経済状況等ほどの程度子どもの生きる力や幸福実感に影響を与え、さらにはそれらの諸属性が自然体験の効果を促進させる場合があり得るのか、という問題である。

この問題を明らかにするためには、新たな調査研究を実施していく必要があるだろう。

また、自然体験関連事業の充実と発展のためには、前節で示した基本的なアプローチを基に新たに実施される荒川区の自然体験活動について、その効果と有効性とを検証することが求められよう。

さらにこれらの研究と並行して、各事業のより効率的かつ効果的な実施のために各自治体の先進事例や最新の研究情報を収集するとともに、それらの知見を区職員と共有していく実践的な取り組みを行うこととしたい。

### C.W.ニコル自然体験大賞

荒川区は平成 27 年度に新たに、自然体験に関する作文を表彰する C.W.ニコル自然体験大賞を設けました。自然の中で経験した様々な出来事や出会い、感動、達成感や充実感について、作家でありナチュラリストの C.W.ニコル氏に宛てる手紙形式で表現した作品を募集したところ、平成 27 年 7 月 21 日から 9 月 30 日の間に合計 726 点の応募がありました。ニコル氏自身が審査し、子どもの部（中学生以下）では大賞 1 点、優秀賞 3 点、佳作 5 点が選ばれ、一般の部では佳作 2 点が選ばれました。



ニコル氏による講演

平成 28 年 1 月 23 日には、日暮里サニーホールで表彰式が開かれ、子どもの部大賞受賞者による大賞作品の朗読や C.W.ニコル氏による受賞作の講評などが行われました。また表彰式後には「自然と人との共生」というタイトルで、C.W.ニコル氏による区民カレッジ特別講演会が開かれ、約 250 人の来場者が講演に熱心に耳を傾けていました。



## プロに聞く！

### プロ・ナチュラリスト 佐々木 洋氏

佐々木洋さんは、プロ・ナチュラリスト\*として、赤ちゃんからお年寄りまで幅広い年代の人に向けて自然を案内する活動をしています。本研究プロジェクトでは、自然体験活動のプロ、佐々木洋さんに特別インタビューを行い、昔の子どもと今の子どもの違いや、自然体験活動を充実させていく上での指導者の心得についてお聞きしました。

——— 自然体験に関して昔の子どもと今の子どもは違うということもよく言われますが。

**佐々木** 「今の子どもは」、「昔の子どもは」、というのは確かによく聞きます。ですが、私の経験から考えると、今も昔も子どもの本質は変わってないと思います。昔の子どもは虫をつかめたとか、昔の子どもはこうだったって言う方がよくいらっしゃるんですけど、子どもの本質は同じなんです。

——— 子どもの本質は同じ。

**佐々木** ただチャンスに恵まれないだけです。たとえば、物理的に柵がしてあったりとか、保護者の方にだめと言われたりとか。僕も子ども達を連れて田んぼに行くことがあるんですが、確かに今の子どもは指をつけるのも嫌がります。ところが誰かがうっかり足を滑らせて、片方の靴を田んぼの中に入れてしまった瞬間に、みんな、うわーって田んぼの中に入りだすんです。この瞬間のことを僕は「呪文が解ける」って言っています。

——— 呪文が解ける。

**佐々木** 現代の呪文にかかった子ども達が、その呪文から解き放たれる瞬間です。子どもにも、これを汚したらお母さんに怒られるとか、こんなことしたら危ないっていう色んな先入観やしが見えられます。

でも1つのきっかけで変わるんです。たとえばあるとき、虫が嫌いだって言う子どもに、ある虫の素晴らしさを話したら今度はその虫を飼いたって言って泣き出したんです。さっきまで嫌いだって言ったのに。それから、カマキリがつかめないって言ってた子ども達に掴み方を教えてあげると「僕にも触らせて」ってみんなカマキリの取り合いになるんですね。

だから結局、僕は、昔も今も子どもの本質は同じだと思うんです。現代文明が悪いというわけでもない。

——— 荒川区も子どもの自然体験を充実させていこうとしています。しかし、全ての事業で佐々木さんのような優れた指導者をつけられるわけではありません。区職員の意識改革やスキルアップが必要なのですが、この点について何かアドバイスをいただけますでしょうか。

**佐々木** 基本的なこととして大きく2つありますね。僕は観察の「かん」は感性の「感」を使っています。自然は観るものではなくて、感じるものであるっていう感覚をまず持ってほしいからです。たとえば、つついりリーダーは声掛けのときに「ほら見てごらん」ばかりになってしまいがちです。でも、「嗅いでごらん」、「聞いてごらん」、「触ってごらん」というように、五感を使って自然を伝えることがすごく大事だと思うんです。ですから「観察」から「感察」へということが1つのテーマだと思います。

それからもうひとつは、身近な場所にこだわっていただきたいんです。皆さんにとっては荒川区であり、ある人にとってはある小学校の校庭であり、またある人にとっては小さなプランターの中なのかもしれません。アマゾンのはよく分からないけど、この校庭だったら木が一本なくなっても分かるよとか、アフリカのことは知らないけれども、このプランターの中に生えてる植物は全部わかるよとか。子どもと一緒に、世界で自分が一番詳しい場所を小さくてもいいから作ってほしいんです。身近な自然にこだわるということ、もっと言い換えれば荒川区の自然にこだわるということ。これをして欲しいと思っています。

# 付表

## 1 調査票

調査

### 移動教室に関するアンケート調査

平成 27 年 9 月  
荒川区自治総合研究所

学校の成績とは関係ありませんので、自分の思うとおりに正直に回答してください。  
質問をよく読み、自分もつともあてはまるところの数字に○印をつけてください。  
わからない質問があったら、簡単に、手をあげて質問してください。

学校名	学年 年	クラス ( ) 組	出席番号 ( ) 番	性別 ( 男 ・ 女 )		
<p>ア) 0から10の数字のうち、自分があてはまるところの1つに○をつけてください。</p> <p>あなたは、幸せだと感じますか</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; border: none;">0—1—2—3—4—5—6—7—8—9—10</td> <td style="width: 50%; border: none; text-align: right;">                 しま あつ おわ せく はな はな い                   しま あつ おわ せく はな はな い             </td> </tr> </table>					0—1—2—3—4—5—6—7—8—9—10	しま あつ おわ せく はな はな い  しま あつ おわ せく はな はな い
0—1—2—3—4—5—6—7—8—9—10	しま あつ おわ せく はな はな い  しま あつ おわ せく はな はな い					

イ) 次の質問からは1から6の数字のうち、自分があてはまるところの1つに○をつけてください。

(1) いやなことは、いやとはつきり言える	1—2—3—4—5—6 あま てつ はな はな い
(2) 人のために何かをしてあげるのが好きだ	1—2—3—4—5—6
(3) 先を見通して、自分で計画が立てられる	1—2—3—4—5—6
(4) 書きや楽さに、まけない	1—2—3—4—5—6
(5) だれにでも話しかけることができる	1—2—3—4—5—6
(6) 花や風景などの美しいものに、感動できる	1—2—3—4—5—6
(7) 多くの人に好かれている	1—2—3—4—5—6
(8) 人の話をきちんと聞くことができる	1—2—3—4—5—6

(9) 自分のことが好きである	1—2—3—4—5—6
(10) ティーン・型 <sup>イ</sup> などの行動を、上手に使える	1—2—3—4—5—6
(11) 自分からすすんで何でもやる	1—2—3—4—5—6
(12) いやがらずに、よく働く	1—2—3—4—5—6
(13) 習慣早起きである	1—2—3—4—5—6
(14) 自分かつてな、おがまを言わない	1—2—3—4—5—6
(15) 小さな失敗をおそれない	1—2—3—4—5—6
(16) 人の心の痛みがわかる	1—2—3—4—5—6
(17) 自分で問題点や課題を見つけることができる	1—2—3—4—5—6
(18) とても痛い <sup>イ</sup> カガをして、がまんできる	1—2—3—4—5—6
(19) 失敗しても、立ち直るのがはやい	1—2—3—4—5—6
(20) 季節の変化を感じることが出来る	1—2—3—4—5—6
(21) だれでも仲よくできる	1—2—3—4—5—6
(22) その場におさわししい行動ができる	1—2—3—4—5—6
(23) だれにでも、あいさつができる	1—2—3—4—5—6
(24) 読書量がなくて、手で読書できる	1—2—3—4—5—6
(25) 前向きに、物事を考えられる	1—2—3—4—5—6
(26) 自分に割り当てられた仕事は、しつかりとやる	1—2—3—4—5—6
(27) からだを動かしても、疲れない <sup>イ</sup>	1—2—3—4—5—6
(28) お金やモノのむだ使いをしない	1—2—3—4—5—6

アンケートはこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。



(事前調査と事後調査で同一の調査票を用いた)

## 2 アンケート結果単純集計表

### 事前調査

(ア) 幸福実感			実感0	実感1	実感2	実感3	実感4	実感5	実感6	実感7	実感8	実感9	実感10	合計
			(まったくあてはまらない)										(とてもあてはまる)	
1	あなたは、幸せだと感じますか	(n)	1	0	3	3	8	28	19	21	54	36	82	255
		(%)	0.4%	0.0%	1.2%	1.2%	3.1%	11.0%	7.5%	8.2%	21.2%	14.1%	32.2%	100.0%

(イ)「生きる力」			1	2	3	4	5	6	合計
			(まったくあてはまらない)					(とてもあてはまる)	
1	いやなことは、いやとはっきり言える	(n)	44	43	31	48	38	51	255
		(%)	17.3%	16.9%	12.2%	18.8%	14.9%	20.0%	100.0%
2	人のために何かをしてあげるのが好きだ	(n)	6	15	36	58	75	65	255
		(%)	2.4%	5.9%	14.1%	22.7%	29.4%	25.5%	100.0%
3	先を見通して、自分で計画が立てられる	(n)	20	40	66	53	48	28	255
		(%)	7.8%	15.7%	25.9%	20.8%	18.8%	11.0%	100.0%
4	暑さや寒さに、まけない	(n)	17	30	44	44	57	63	255
		(%)	6.7%	11.8%	17.3%	17.3%	22.4%	24.7%	100.0%
5	だれにでも話しかけることができる	(n)	18	32	37	42	50	76	255
		(%)	7.1%	12.5%	14.5%	16.5%	19.6%	29.8%	100.0%
6	花や風景などの美しいものに、感動できる	(n)	17	34	34	50	63	57	255
		(%)	6.7%	13.3%	13.3%	19.6%	24.7%	22.4%	100.0%
7	多くの人に好かれている	(n)	41	42	66	62	33	11	255
		(%)	16.1%	16.5%	25.9%	24.3%	12.9%	4.3%	100.0%
8	人の話をきちんと聞くことができる	(n)	4	31	46	58	68	48	255
		(%)	1.6%	12.2%	18.0%	22.7%	26.7%	18.8%	100.0%
9	自分のことが大好きである	(n)	28	49	50	49	34	45	255
		(%)	11.0%	19.2%	19.6%	19.2%	13.3%	17.6%	100.0%
10	ナイフ・包 <small>ハウチョウ</small> 丁 <small>ハモノ</small> などの刃物を、上手に使える	(n)	20	21	32	53	66	63	255
		(%)	7.8%	8.2%	12.5%	20.8%	25.9%	24.7%	100.0%

11	自分からすすんで何でもやる	(n)	13	34	60	68	46	34	255
		(%)	5.1%	13.3%	23.5%	26.7%	18.0%	13.3%	100.0%
12	いやがらずに、よく働く	(n)	14	24	72	71	42	32	255
		(%)	5.5%	9.4%	28.2%	27.8%	16.5%	12.5%	100.0%
13	ハヤネ 早寝早起きである	(n)	31	42	55	52	40	35	255
		(%)	12.2%	16.5%	21.6%	20.4%	15.7%	13.7%	100.0%
14	自分かってな、わがままを言わない	(n)	15	25	67	66	58	24	255
		(%)	5.9%	9.8%	26.3%	25.9%	22.7%	9.4%	100.0%
15	小さな失敗をおそれない	(n)	20	31	43	46	52	63	255
		(%)	7.8%	12.2%	16.9%	18.0%	20.4%	24.7%	100.0%
16	人の心の痛みがわかる <small>イタ</small>	(n)	5	17	51	50	73	59	255
		(%)	2.0%	6.7%	20.0%	19.6%	28.6%	23.1%	100.0%
17	自分で問題点や課題を見つけることができる	(n)	23	28	69	50	48	37	255
		(%)	9.0%	11.0%	27.1%	19.6%	18.8%	14.5%	100.0%
18	とても痛いケガをしても、がまんできる <small>イタ</small>	(n)	19	24	42	43	56	71	255
		(%)	7.5%	9.4%	16.5%	16.9%	22.0%	27.8%	100.0%
19	失敗しても、立ち直るのがはやい	(n)	13	29	44	52	57	60	255
		(%)	5.1%	11.4%	17.3%	20.4%	22.4%	23.5%	100.0%
20	季節の変化を感じるができる	(n)	14	11	30	50	55	95	255
		(%)	5.5%	4.3%	11.8%	19.6%	21.6%	37.3%	100.0%
21	だれとでも仲よくできる	(n)	13	20	40	60	64	58	255
		(%)	5.1%	7.8%	15.7%	23.5%	25.1%	22.7%	100.0%
22	その場にふさわしい行動ができる	(n)	8	23	55	77	56	36	255
		(%)	3.1%	9.0%	21.6%	30.2%	22.0%	14.1%	100.0%
23	だれにでも、あいさつができる	(n)	8	25	26	49	61	86	255
		(%)	3.1%	9.8%	10.2%	19.2%	23.9%	33.7%	100.0%
24	センタクキ 洗濯機がなくても、手で洗濯できる <small>センタク</small>	(n)	44	43	31	48	38	51	255
		(%)	17.3%	16.9%	12.2%	18.8%	14.9%	20.0%	100.0%
25	前むきに、物事を考えられる	(n)	13	34	60	55	41	52	255
		(%)	5.1%	13.3%	23.5%	21.6%	16.1%	20.4%	100.0%
26	自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる <small>ワ</small>	(n)	5	11	30	56	60	93	255
		(%)	2.0%	4.3%	11.8%	22.0%	23.5%	36.5%	100.0%
27	からだを動かしても、疲れにくい <small>ツカ</small>	(n)	29	24	49	52	45	56	255
		(%)	11.4%	9.4%	19.2%	20.4%	17.6%	22.0%	100.0%
28	お金やモノのむだ使いをしない	(n)	9	17	33	41	58	97	255
		(%)	3.5%	6.7%	12.9%	16.1%	22.7%	38.0%	100.0%

## 事後調査

(ア) 幸福実感		(n)	(まったくあてはまらない)	実感0	実感1	実感2	実感3	実感4	実感5	実感6	実感7	実感8	実感9	(とてもあてはまる)	実感10	合計
			1	0	1	6	6	25	14	26	45	46	85	255		
1	あなたは、幸せだと感じますか	(%)	0.4%	0.0%	0.4%	2.4%	2.4%	9.8%	5.5%	10.2%	17.6%	18.0%	33.3%	100.0%		

(イ)「生きる力」		(n)	(まったくあてはまらない)	1	2	3	4	5	(とてもあてはまる)	6	合計
			1	2	3	4	5	6	255		
1	いやなことは、いやとはっきり言える	(%)	12.9%	17.3%	12.5%	16.9%	19.2%	21.2%	100.0%		
2	人のために何かをしてあげるのが好きだ	(%)	3.5%	4.3%	14.9%	20.8%	28.2%	28.2%	100.0%		
3	先を見通して、自分で計画が立てられる	(%)	6.7%	12.2%	23.5%	25.1%	18.8%	13.7%	100.0%		
4	暑さや寒さに、まけない	(%)	6.3%	8.6%	14.9%	20.0%	27.1%	23.1%	100.0%		
5	だれにでも話しかけることができる	(%)	2.7%	9.4%	20.8%	20.0%	20.0%	27.1%	100.0%		
6	花や風景などの美しいものに、感動できる	(%)	5.1%	7.1%	13.7%	23.9%	21.2%	29.0%	100.0%		
7	多くの人に好かれている	(%)	7.1%	16.5%	24.7%	24.3%	19.6%	7.8%	100.0%		
8	人の話をきちんと聞くことができる	(%)	3.1%	4.7%	17.3%	23.9%	31.0%	20.0%	100.0%		
9	自分のことが大好きである	(%)	7.8%	16.9%	19.6%	20.4%	16.5%	18.8%	100.0%		
10	ナイフ・包 <small>ハウチョウ</small> 丁 <small>ハモノ</small> などの刃物を、上手に使える	(%)	3.9%	8.6%	11.4%	18.8%	27.1%	30.2%	100.0%		
11	自分からすすんで何でもやる	(%)	3.9%	9.8%	20.8%	24.3%	24.7%	16.5%	100.0%		

12	いやがらずに、よく働く	(n)	5	32	52	65	60	41	255
		(%)	2.0%	12.5%	20.4%	25.5%	23.5%	16.1%	100.0%
13	ハヤネ 早寝早起きである	(n)	30	25	53	59	51	37	255
		(%)	11.8%	9.8%	20.8%	23.1%	20.0%	14.5%	100.0%
14	自分かってな、わがままを言わない	(n)	8	26	64	67	50	40	255
		(%)	3.1%	10.2%	25.1%	26.3%	19.6%	15.7%	100.0%
15	小さな失敗をおそれない	(n)	11	30	42	56	53	63	255
		(%)	4.3%	11.8%	16.5%	22.0%	20.8%	24.7%	100.0%
16	人の心の痛み <sup>イタ</sup> がわかる	(n)	7	20	37	60	68	63	255
		(%)	2.7%	7.8%	14.5%	23.5%	26.7%	24.7%	100.0%
17	自分で問題点や課題を見つけることができる	(n)	12	24	64	58	55	42	255
		(%)	4.7%	9.4%	25.1%	22.7%	21.6%	16.5%	100.0%
18	とても痛いケガ <sup>イタ</sup> をしても、がまんできる	(n)	16	26	31	58	56	68	255
		(%)	6.3%	10.2%	12.2%	22.7%	22.0%	26.7%	100.0%
19	失敗しても、立ち直るのがはやい	(n)	11	25	40	56	53	70	255
		(%)	4.3%	9.8%	15.7%	22.0%	20.8%	27.5%	100.0%
20	季節の変化を感じるができる	(n)	6	11	29	59	59	91	255
		(%)	2.4%	4.3%	11.4%	23.1%	23.1%	35.7%	100.0%
21	だれとでも仲よくできる	(n)	9	15	43	55	64	69	255
		(%)	3.5%	5.9%	16.9%	21.6%	25.1%	27.1%	100.0%
22	その場にふさわしい行動ができる	(n)	5	17	56	71	54	52	255
		(%)	2.0%	6.7%	22.0%	27.8%	21.2%	20.4%	100.0%
23	だれにでも、あいさつができる	(n)	3	17	34	47	61	93	255
		(%)	1.2%	6.7%	13.3%	18.4%	23.9%	36.5%	100.0%
24	センタクキ 洗濯機 <sup>センタク</sup> がなくても、手で洗濯できる	(n)	33	44	32	43	49	54	255
		(%)	12.9%	17.3%	12.5%	16.9%	19.2%	21.2%	100.0%
25	前むきに、物事を考えられる	(n)	7	29	50	68	47	54	255
		(%)	2.7%	11.4%	19.6%	26.7%	18.4%	21.2%	100.0%
26	自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる <sup>ワ</sup>	(n)	5	9	34	49	79	79	255
		(%)	2.0%	3.5%	13.3%	19.2%	31.0%	31.0%	100.0%
27	からだを動かしても、疲れにくい <sup>ツカ</sup>	(n)	17	38	49	49	48	54	255
		(%)	6.7%	14.9%	19.2%	19.2%	18.8%	21.2%	100.0%
28	お金やモノのむだ使いをしない	(n)	9	17	27	40	63	99	255
		(%)	3.5%	6.7%	10.6%	15.7%	24.7%	38.8%	100.0%

## 参考文献

- 阿部彩 (2012) 「「豊かさ」と「貧しさ」: 相対的貧困と子ども」『発達心理学研究』 23(4), 362-374.
- 荒川区 (2009) 『荒川区花と緑の基本計画』.
- (2011) 『(仮称) 荒川二丁目複合施設基本計画』.
- (2015a) 「平成 27 年度予算主要事業」  
[http://www.city.arakawa.tokyo.jp/kusei/zaisei/yosan/h270204yosan.files/h27\\_shuyoujigyou.pdf](http://www.city.arakawa.tokyo.jp/kusei/zaisei/yosan/h270204yosan.files/h27_shuyoujigyou.pdf).
- (2015b) 「荒川区動植物データベース」  
<https://www.city.arakawa.tokyo.jp/kankyo/kunaikankyo/ikimono/database.html>.
- 荒川区自治総合研究所 (2011a) 『荒川区民総幸福度 (GAH) に関する研究プロジェクト中間報告書』.
- (2011b) 『子どもの貧困・社会排除問題研究プロジェクト最終報告書: 地域は子どもの貧困・社会排除にどう向かい合うのか〜あらかわシステム〜』.
- (2011c) 『子どもの未来を守る: 子どもの貧困・社会排除問題への荒川区の取り組み』.
- (2012) 『荒川区民総幸福度 (GAH) に関する研究プロジェクト第二次中間報告書』.
- (2015a) 『荒川区民総幸福度 (GAH) レポート vol. 1: GAH 指標を用いた区民アンケート調査結果の分析』.
- (2015b) 『荒川区民総幸福度 (GAH) レポート vol. 2: 区民アンケート調査の分析からみる防災力や地域力向上の取り組み』.
- 石田憲治 (2010) 「農作業体験学習圃場としての休耕地の活用」『農業および園芸』 85(4), 413-419.
- 大藪泰・林もも子・小塩真司・福川康之 (2014) 『人間関係の生涯発達心理学』丸善出版.
- カーソン, レイチェル (1996) 『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳, 新潮社. [Carson, R. 1956. *The Sense of Wonder*. New York: Harper & Row]
- 片岡美喜 (2008) 「農業者による農業体験活動の展開と発展要因」『農業および園芸』 83(1), 95-103.
- 環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム (2015) 『「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト中間とりまとめ』 <http://www.env.go.jp/press/morisato/tyuukan/mat02.pdf>.
- 厚生労働省 (2014) 「平成 25 年国民生活基礎調査」 <http://www.e-stat.go.jp/>.
- 青少年教育振興機構 (2010) 『事業評価に使える! 「生きる力」の測定・分析ツール』  
[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/69/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/69/).
- 青少年教育振興機構 (2014) 『青少年の体験活動等に関する実態調査』(平成 24 年度調査) 報告書』  
[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/84/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/84/).
- 橘直隆・平野吉直・関根章文 (2003) 「長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響」『野外教育研究』 6(2), 45-56.
- 富吉満之・北野慎一 (2014) 「農関連 NPO 法人における委託事業の影響と農林地の利用特性」『システム農学』 30(3), 77-86.
- 広井良典 (2006) 『持続可能な福祉社会: 「もうひとつの日本」の構想』ちくま新書 606, 筑摩書房.
- (2011) 『創造的福祉社会: 「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』ちくま新書 914, 筑摩書房.
- (2015) 『ポスト資本主義: 科学・人間・社会の未来』岩波新書 1550, 岩波書店.
- 文部科学省 (2011) 「現行学習指導要領の基本的な考え方」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/idea/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/).

- 若林憲子 (2013) 「グリーンツーリズムの教育旅行による農家民宿・農家民泊の受入と農業・農村の展開可能性」『地域政策研究』15(3), 159-179.
- Bittar, R. (2009). Subjective Wellbeing Maintenance: Investigating Depression as Suppressed Homeostatically Protected Mood (Doctoral dissertation, PhD Thesis, Deakin University, Australia).
- Cummins, R. A. (2010). Subjective Wellbeing, Homeostatically Protected and Depression: A Synthesis. *Journal of Happiness Studies*, 11, 1-17.
- Cummins, R. A., Gullone, E., & Lau, A. L. (2002). A model of subjective well-being homeostasis: The role of personality. In *The universality of subjective wellbeing indicators* (pp. 7-46). Springer Netherlands.
- Cummins, R. A., Lau, A. A., Mellor, D., & Stokes, M. A. (2009). Encouraging Governments to Enhance the Happiness of their Nation: Step 1: Understand Subjective Wellbeing. *Social Indicators Research*, 91(1), 23-36.
- Cummins, R. A., Li, N., Wooden, M., & Stokes, M. (2014). A Demonstration of Set-Points for Subjective Wellbeing. *Journal of Happiness Studies*, 15(1), 183-206.
- Cummins, R. A., & Nistico, H. (2002). Maintaining Life Satisfaction: The Role of Positive Cognitive Bias. *Journal of Happiness Studies*, 3(1), 37-69.
- Davey, B. (2004). Failure of Homeostatic Subjective Well-being as a Model for Depression: An Empirical Study. *Unpublished Graduate Diploma thesis, Deakin University, Melbourne.*
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle: Selected Papers*, with a historical introduction by David Rapaport. New York: International Univ. Press.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and Society*, 2<sup>nd</sup> ed. New York: Norton.
- HCN&DACRSPNE [Health Council of the Netherlands and Dutch Advisory Council for Research on Spatial Planning, Nature and the Environment]. (2004). *Nature and Health: The influence of nature on social, psychological and physical well-being*. The Hague: Health Council of the Netherlands and RMNO.
- International Wellbeing Group. (2013). *Personal Wellbeing Index - Audit: Manual 2013*.
- Kals, E., Schumacher, D., & Montada, L. (1999). Emotional Affinity toward Nature as a Motivational Basis to Protect Nature. *Environment and Behavior*, 31(2), 178-202.
- Kaplan, R. & Kaplan, S. (1989). *The Experience of Nature*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Leopold, A. (1949). *A Sand Country Almanac and Sketches here and there*. Oxford: Oxford Univ. Press.  
[レオポルド, アルド『野生のうたが聞こえる』新島義昭訳、講談社学術文庫 1301、講談社、1997]
- Lykken, D. & Tellegen, A. (1996). Happiness is Stochastic Phenomenon. *Psychological Science*, 7(3), 186-189.
- Müller, M. M., Kals, E., & Pansa, R. (2009). Adolescents' Emotional Affinity toward Nature: A Cross-Societal Study. *The Journal of Developmental Processes*, 4(1), 59-69.
- OECD. (2014). Family database: CO2.2. Child poverty.  
<http://www.oecd.org/social/family/database.htm>.
- van den Berg A. E., & van den Berg M. M. H. E. (2002). *Van buiten word je beter*. Wageningen: Alterra.

# 研究会議名簿

## 自然体験を通じた子どもの健全育成研究プロジェクト研究会議 名簿

(平成 28 年 3 月 31 日現在)

広井 良典	千葉大学法政経学部教授 (座長)
宮下 佳廣	千葉大学法政経学部福祉環境センター特別研究員
川原 健太郎	早稲田大学教育・総合科学学術院助教
則久 雅司	環境省自然環境局動物愛護管理室長
松葉 ひろ美	千葉大学大学院人文社会科学研究科特別研究員
佐藤 峻	千葉大学大学院博士課程
西川 太一郎	荒川区長・荒川区自治総合研究所理事長
猪狩 廣美	荒川区総務企画部長
池田 洋子	荒川区地域文化スポーツ部長
青山 敏郎	荒川区子育て支援部長
佐藤 泰祥	荒川区地域文化スポーツ部文化交流推進課長
小山 勉	荒川区教育委員会指導室長
二神 常爾	荒川区総務企画部区政調査専門員
二神 恭一	荒川区自治総合研究所所長
檀上 和寿	荒川区自治総合研究所副所長
佐藤 宏嗣	荒川区自治総合研究所研究員
早川 純	荒川区自治総合研究所研究員
海老原 麻美	荒川区自治総合研究所研究員
河野 志穂	荒川区自治総合研究所研究員
山田 庄太郎	荒川区自治総合研究所研究員

(研究会議開催回数…5回)

自然体験を通じた子どもの自然体験研究プロジェクト

中間レポート

平成 28 年 3 月

発行：公益財団法人荒川区自治総合研究所（RILAC）

Research Institute for Local government by Arakawa City

住 所 〒116-0002  
東京都荒川区荒川 2-11-1  
電話番号 03-3802-4861  
ファックス 03-3802-2592  
ホームページ <http://www.rilac.or.jp/>  
メールアドレス [info@rilac.or.jp](mailto:info@rilac.or.jp)